

---

# 司書官と侍女の魔王様

篠崎 伊織

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

司書官と侍女の魔王様

### 【Nコード】

N1663K

### 【作者名】

篠崎 伊織

### 【あらすじ】

王宮の下っ端である司書官と侍女の弟は、当代魔王のご嫡男。王城に召喚された《封じの巫女》は、全ての魔を封じ込めようと決意した、逆ハ―属性の女子高生。

そこらの魔物やら魔族やら魔王やらが封印されるのは別にいい。まあ仕方ない。

だけれども、怠惰で育児放棄中な魔王様の、たった一人の息子だったりする弟のフランが封印されるのはいけ好かない。

司書官アデルと侍女フィリス、魔王の亡き妃の養い子である二人

は、あの手この手で逆ハー少女の魔性退治から、幼い弟を守るべく奔走するが……。

異世界側から見た、異世界トリップファンタジー。

【現在更新凍結中です】

00 - - - 遺児達より、魔術師に宛てて

拝啓

宮廷魔術師長　オディロン・デシャン殿

はじめまして。

差出人の名に心当たりも無く、加えてまじないも施されているこの手紙を、貴殿は警戒している事でしよう。

あらかじめ予め記しておきますと、手紙に埋め込んだのは無害な術にすぎません。

インクに仕掛けたのは、この手紙の内容が広まらぬよう、読まれた後に文字を消し去るモノ。

用紙に埋め込んだのは、手紙に記されている内容を、私達の手元に置いてある対の用紙に転写するモノ。

ただそれだけの術式です。

さて、まじないをかけてまで貴殿に手紙を綴ったのには、当然ながら理由があります。

先日、私達の母が死にました。

母は名を、クロエ・ランベールと言いました。当代魔王の妻クロエと、そう記せば誰を指しているか、貴殿に伝わるでしょうか。

私はクロエの第一子で、アデル・ランベールと言います。魔王の血を引かぬ、クロエの養い子　つまりは貴殿と同じ人の子です。

それに免じて、母クロエと同じように、私にもある程度の信を置いて貰えれば良いのですが。

…… 本題に入りましょう。

母の死によって、ランベール家に一つ問題が発生しました。

弟が、保護者を亡くした事により、後見を必要とする立場に追い込まれたのです。

私及びクロエの第二子フィリスは、既に<sup>よわい</sup>齡十四を数えましたから、後見を得なくとも問題ありません。

しかし、第三子のフランシスはまだ五歳。ルーデインの王国法に則るならば、未だ<sup>ま</sup>後見を定めなければならぬ年齢です。

ご存知の通り、弟は魔族と人間の混血ですから、幼い内から孤児院の類に預けるのには不安があります。

弟の実父は当てになりません。何しろ魔王ですので。彼に任せるなど、弟のこれからの生活が憂えられます。

そもそも奴は、『フランシスは半分は人間であるのだから、人としての成人の年までは人の子として育てたい』と言う亡母の願いを尊重するなどと言って、先日の葬儀の折に養育の義務すら放棄しました。兄として、そんな駄目な父親に弟を託すなど、許せる事ではありません。これについてはフィリスも同じ意見です。

出来る事ならば私かフィリスが弟の後見となりたいのですが、前述の通り成人していませんのでそれも叶いません。

つきましては、生前に母と契約を結んでいた貴殿に、期限付きで弟の後見を頼みたいのです。

勿論、私とフィリスが正式に成人するまでで結構です。申請を始めとする事務手続きに必要な費用は、母の遺産からお支払いできます。

重ねて記しておきますと、弟、フランシス・ランベールは当代魔王の最も近い血族です。同時にクロエ・ランベールの血を色濃く継ぐ、彼女の唯一の実子なのです。

下手な人物に預ければ、きっと好ましくない結果となるでしょう。けれどそれだけは、どうしても避けたいのです。

そろそろ用紙も尽きてきました。

用件のみとなつてしまいましたが、この辺りで筆を置かせていただきます。

蛇足ながら、まじないを施したのは私ではなくフィリスです。筆跡を利用してのまじない返しの類は、恐らく効果が無いでしょう。

返信は文字の消えた後に、普通のインクでこの紙に記してください。れば結構です。先に記したとおり、対の紙へ文字が転写されるよう、術式が籠められていますので。その際、魔術の類の行使は必要ありません。

それでは、返信が色よい物となる事を祈りつつ。

敬具

グランヴェーダ暦791年2月 アデル・ランベール 及び フィリス・ランベール

00 - - 遺児達より、魔術師に宛てて（後書き）

初めての投稿になります。

魔法とか王族とか魔王とか異世界トリップとか逆ハーレムとか傍観とかのお約束ワードを絡ませたモノを、くるっとひねって斜め左奥とかからの妙な視点から書いていこうと思っています。  
遅筆ですが、どうぞよろしくお願いします。

## 01 - - 侍女は異人に遭遇する

ルーデイン王国の政治中枢にして、王家の一族の住まうヴァライア王宮。

深い焦茶色の侍女服を纏ったフィリスは、持ち場を離れて王城の南西に位置する離れに向かっていた。

長い飴色の髪を黒い幅広のリボンでくくった、十八歳の瘦身の少女。

藍色の瞳をした彼女は、南の棟の衣裳部屋に控える侍女である。フィリスが向かう先は、宮殿の西の一角が王族の住居になっていると言う構造上、警備の関係で一種の倉庫のようになっている。

主に官吏たちの使う事務用品や、王宮で働く侍女達が用いる備品が納められているのだ。

フィリスが其処へ赴くのも、必要な備品を補充する為だった。南の衣裳部屋は、宮廷に出仕している官吏や衛士、宮廷魔術師達の制服の修繕や仕立てを主な仕事としている。フィリスもまた、先刻までは同僚達と官服の修繕をしていた。しかし、途中で作業に必要な糸が無くなってしまったので、今こうして王宮の廊下を歩いている。運の悪い事に、使っていたのは在庫が殆ど尽きていた山鳩色の刺繍系だったからだ。先日、来月から着任する新任の官吏達の制服を、部屋付きの侍女総出で仕立てたのだが、その時に山鳩色の刺繍系は殆どが消費されてしまっていた。

そして先程フィリスが最後の一束を使い切ってしまったので、彼女は仕方なしに南西の離れへ在庫を取りに行く破目になったのだ。

侍女頭から借り受けた保管部屋の扉の鍵を、フィリスは腕に抱えた私物であるケープの下で、ため息混じりにもてあそんだ。



離れに行くには渡り廊下のかかった、数ある庭の内の一つを通らなければならない。しかし、あそこは建物の構造上寒いのだ。日陰になっている。

しかも仕事場を出てきたときは正午の少し前だった。手早く用事を終わらせて戻らなければ、昼食に遅れてしまうかもしれない。

今日は初春のいい天気であつたが、そう言う訳で彼女は少し憂鬱であつた。

少し歩調を速めると、フィリスは廊下の角を曲がる。

何人かの官吏や侍女、女官たちとすれ違いながら道なりに歩いていくと、やがて木製の大扉が見えてきた。

開けると中庭の渡り廊下に出る、通路用の扉だ。当然番人は居なかつたが、フィリスはその前まで辿り着くと一度立ち止まつた。

抱えたままのケープを纏うためだ。この扉の外は渡り廊下になっている。冬服とは言え侍女の制服だけで、風の強い其処を歩く気にはなれなかつた。

侍女服の上から、萌葱色の裏地のついた黒いケープを羽織ると、彼女は扉に手をかけた。

案の定外に出てみれば、吹く風は酷く冷たい。

フィリスは先程よりも僅かに歩幅を広げて、半ば駆け抜けるように渡り廊下を横切りだした。

うなじの位置で一つに結ばれた、長い飴色の髪も少しばかり風に煽られる。

春の訪れを感じさせる庭には幾つかの花が咲き、木々も新芽を芽吹かせていた。ふと立ち止まって眺めたくなるような風景だったが、あいにくフィリスにそんな余裕は無かつた。寒いのだ。その上刺繍糸の調達に使える時間も限られている。

フィリスは足早に廊下を渡りきると、間を置かずに渡り廊下の先にあつた扉を開けて屋内へと入った。

時間が惜しい。ケープを着たまま、彼女は幾つかの部屋の前を通り過ぎて、目的の場所を目指す。

けれど程なくしてたどり着いた部屋の前で、鍵を右手に持ち替えたその時。

辺りに、場違いな音が響いた。

大きなものが落ちた時のどさりと言う重い音。

次いで、      きゃあつ、と。

主に布地や糸を収納しているその部屋の中から微かに、くぐもつた人の声が響く。それは驚いた時に発せられる、小さい悲鳴のようだった。

妙である。仮にも王宮の備品が仕舞われている部屋なのだから、部屋の扉には鍵がかかっている。この部屋は西側の中庭に面しているので窓も有るが、それらは魔法の一種で封印が施されていた。

そもそもこの部屋の扉を持っているのは、王城内の三箇所の衣裳部屋を実質的に取りまとめている三人の侍女頭の内、南の部屋を任されているフィリスの直属の上司だけだった。仕舞われている布地や糸は、官服の素材として使われるものが大半なのだから。

そして、彼女から今鍵を預かっているのはフィリスなのだから、中に人が居るなどおかしい。

怪訝に思いながら、彼女は恐る恐る鍵穴に鍵を差し込んだ。くるりと回すと、かしやりと音を立てて鍵は開く。      間違いない。今まで鍵は閉まっていたのだ。だと言うのに、部屋の中から人の声が聞こえるとは、一体どう言う事なのか。

「え、嘘、人!？」

すると鍵の開く音を聞きつけたのか、部屋の中からまた誰かが声を上げた。

大きさ自体は小さいものであったが、今度ははっきりと聞こえる。それは、若い女の声であった。

フィリスは少し眉根を寄せると、左手でケープの胸元をぎゅっと握り締めた。右手をドアノブにかけ、ゆっくりと扉を開く。

光がまた一筋、部屋の中に差し込んだ。

「誰か、居るの?」

そのまま扉を閉めずに、彼女は室内へと足を踏み入れる。

ずっと視線をめぐらせると、左奥の明り取りの窓の下に、誰かが座り込んでいた。先程の声の主だろうか。十五か十六ほどの、若い娘だ。

ふわふわとした黒に近い茶色の髪は短く、肩を少し越した辺りまでしかない。対して目は黒く、纏う装束は目に寒々しく映った。踊り子の着るような短いスカートに、腕をむき出しにした半袖なのだ。素足を見せる短いスカートは武器を扱う女性の正装にも見られるが、普段から着用するものではない。

此処は王宮であるから、正装の女武人が居ても全くおかしくは無かったが、少女の傍らには武器が無かった。

王宮に参じられるほどの武人ならば、周囲からの信頼も彼らの誇りもある。武器の持参は別段咎められる事ではないから、彼女が武人であったならば、獲物を身につけていないのは逆に不自然だった。それに、そもそもこの部屋のある棟はあまり人が近寄らないのだ。備品の在庫の補充など、全ての部署をあわせても日に一人がこの離れにくるか来ないかだし、何より庭を隔てれば王族の住居に繋がっている。内部の者でも外部の者でも、どちらにしても滅多に来る場所ではない。

けれど、何故鍵のかかっていたこの部屋の中に居たのかはすぐに分かった。少女の後ろにある窓が開いていたのだ。仕掛けられた魔法は解除されてしまったのだろうか、今や其処に封印の痕跡は無い。と、言う事は彼女は魔術師だろうか。封印の解け方が、まるで始めから何も無かったかのように、綺麗すぎるのが胡乱つらんではあるが。

「誰です？ 何故此处に居るの」

探るようにフィリスが口調を強めると、少女はびくりと肩を跳ねさせて声を張り上げた。

「ご、ごめんなさい！ あの、でも、仕方なかったの！ 追いかけてられてっ」

「追われているの？」

フィリスは軽く目を瞠った。王宮内で追われているなど……曲者だろうか。

ドアは開けたままだ。何かあれば逃げられる。それだけ確認すると、フィリスは座り込んだままの少女の反応を待った。

「そう！ 私、逃げてきたの。瞬きして気付いたら変な模様の床の上に居て、変な人たちがこつちに剣なんか向けてて……怖くなつて窓から外に逃げてきたの！」

混乱気味に、そこまで一息で言い切ると、少女は涙目で此方を見上げてきた。

「お願い、助けて！ あの人たち、わけわかんない事ばかり言ってくるの！ それに変な服だし、怪しいよっ」

暴走して少女が連ねる言葉に、フィリスはケープの襟元を握る力を、少しだけ強める。

瞬間的に自分が居たのとは異なる場所に、と言う事態には心当たりが無いわけでもない。が、剣を向けられていたと言う事は、やはり彼女は侵入者か何かなのだろうか。

それにしても、床に描かれた妙な紋様と言うのが気になる。

「そう、ですか……。あなたに剣を向けていたと言う人々は、どのような服装を？」

先んじて、疑問を解決したかったフィリスは、不審がられる事を承知でそう問いかけた。

剣の持ち主が衛士だったなら、彼女は曲者の類で確定だ。けれど、それが魔術師や神官であつたなら、向けてきた剣は少女を害す意思の無い、儀礼用の物である可能性が高い。彼らは武器を使った殺生はあまり行わないのだから。

「え？ あ、ええつと、青、だったかな？ 薄い青系のびらびらしたコートだったよ」

果たして『何故そんなことを聞くのか？』と言った疑問は返つてこなかった。

少女が提示した情報は、魔術師を連想させる物。

ならば、彼女は王宮に害なすモノでは無いのだろう。宮廷に仕掛けを張り巡らせている魔術師を前に、捕縛されない侵入者は少ない。明らかに不審な格好で、情報を零してゆく彼女がその少数である可能性は、フィリスには考えられなかった。

となると、彼女が何であるか、思い当たる節が出てくる。

向けられた儀礼用の剣、床の紋様、不審な格好、魔術師。

彼女が今居る此処が、王宮内の魔術師に割り当てられた一角となり離れているのがひっかかるが、恐らく浮かべた答えは間違っては居ないだろう。

ケープから左手を離し、フィリスは床に膝を突いてかがんだ。少女の警戒を解かせるように、その藍色の瞳に同情の色を浮かべる。そして少女の黒色の目に視線を合わせた。

「大変でしたね。私は此処に勤める侍女で、フィリス・ランベールと言います。あなたの名前を伺っても？」

「うん。私はユイカ。イサワユイカだよ。ええっと、フィリスさん？」

「ユイカさんですね、分かりました」

この国の響きではない名前だった。

けれどそれも、フィリスにとっては彼女の推測を後押しする材料でしかない。

「では、ここから出ましょう。衛士のどなたかに申請すれば、恐らく保護してくださるでしょうから。案内しますので、そちらへ行きましょう」

「保護……安全なの？ 家に帰れるかな？」

「そうですね、何の問題も無ければ」

穏やかな声音でユイカに告げると、彼女はほっとしたように微笑んだ。

それを確認したフィリスはすっと立ち上がり、ユイカに「立ってください」と声をかけた。

彼女がおたおたと立ち上がるのを見届けると、フィリスはユイカ

と立ち位置を入れ替わるようにして開いたままの窓を閉める。

元のような封印を施す事はできなかったが、一見しただけでは異変は見つからないだろう。ユイカの保護と一緒に、窓の術式が破られていた事も衛士に伝えれば、宮廷魔術師に連絡が行くはずだ。

次いで彼女は、刺繍系の在庫が仕舞われている棚へ向かうと、当初の目的を果たすために山鳩色の刺繍系を捜しだす。

目的のものは案外すぐに見つかった。棚から刺繍系のぎつしりと詰まっている小箱の一つを取り出し、フィリスは左手でそれを抱える。

ユイカの方へ振り返ると、彼女は物珍しげに室内のあちこちへ視線を遣っていた。

「ユイカさん、行きましょう」

フィリスが声をかけると、ユイカは「はい！」と彼女の方を向いた。

そして開け放したままの扉へ向かうフィリスの後をついてくる。ユイカは靴を履いておらず、足を包む白い靴下は乾いた土で汚れていた。

下働きの誰かに、この部屋と廊下の掃除を、改めて頼まなければ。

フィリスが僅かにため息をついたのにも気付かずに、ユイカは壁の装飾や床の造りが珍しいのか、きよろきよろとあたりを見回している。

でも、それも仕方ないのかもしれないとフィリスは思った。

「ユイカさん、此処から先は少々複雑な造りです。はぐれないよう、注意してくださいね」

彼女は恐らくではあるが、この国ではない何処かより、宮廷魔術師によって召喚された異人であるのだろうから。

淡い青は魔術の象徴。その色を公の制服として纏うのは、宮廷魔術師達であった。

床の紋様は魔法陣で、向けられた儀礼剣は、おそらく召喚の為の

魔力の収束させる媒体と考えるのが妥当だろう。

ユイカが妙な衣服を身に着けているのも、『一瞬で移動した』と言うのも、遠い地より召喚されたのならば説明がつく。

もつとも、元々は人の領分に在る魔術ではないのだから、召喚魔法には危険が伴うし、専用の魔法陣を描くのには高価な材料が必要と記憶している。滅多に行われる事ではなかったから、その辺りは妙ではある。

それに、ユイカを見つけたときに、部屋の窓の封印が解除されていたのも気がかりだ。

しかし、フィリスは一介の侍女である。

必要以上に詮索するよりも、何も知らず、気付いていないフリをして行動するのが、即ち己と周囲の安全に直結すると考えた。

つまり、フィリスはユイカを『何者かに追われていたと証言する、南西の離れで見つけた少女』として、その身柄を衛士に保護してもらうだけでいい。

後の事は全て彼らが判断し、処理してくれる。それがユイカを侵入者とするモノでも、不審なだけの迷い人とするモノでも、はたまたフィリスの予測通り召喚された異人とするモノでも、彼女には関係の無い事だった。

ただ『助けて』と請われただけの初対面の異人の保護以上に大切なモノなんて、フィリスにはいくらでも存在する。それはある意味非情であると言えるかもしれないけれど、ユイカの言が虚言で無いとは限らないのだ。危険な橋など渡りたくはない。

「わかりました！」との言葉と同時に、ユイカが己に続いて部屋の外へ出たのを確認すると、フィリスは開いている右手で、部屋の扉をきつちりと閉める。

そして、彼女は右手の鍵を使い、ゆつくりと扉に鍵をかけた。





## 01 - - 侍女は異人に遭遇する（後書き）

区切りの悪い序章しか投稿していないにもかかわらず、お気に入りやお気に入りユーザーに登録してくださった方が居るようで。こんなに中途半端なのに申し訳ないやら嬉しいやら。本当に、どうもありがとうございます。

最初の方は地の分ばかりで、文章が重苦しいかもしれません。キラクターが出てきて固まってくる頃には、もう少し軽い感じの文章に仕上げられればと思います。

## 02・・・ランベール家の子供達

結論から言うと、フィリスはユイカを衛士詰め所まで連れて行き、そこで彼女の身柄を衛士に託した。

そして保管部屋の窓の封印が破られていた事、室内が土で汚れている事も伝えておく。衛士に伝えれば、警備やらの部署の関係で、宮廷魔術師にも下働きの者にも連絡が行くだろう。

それだけである。彼女は役割を終えた。

加えてユイカと遭遇した時の状況及び己の所属と名前も伝えたフィリスは、ユイカを担当の衛士に任せてすぐに衣裳部屋に戻った。

フィリスは職務中なのだ。いくら常ならぬ事態に遭遇したとしても、そちらにばかりかまけていては、彼女の評価と今月の給料が下がるかもしれない。一家の家計を預かる身としては、それは困る。

そう言う訳で衣裳部屋に戻ったフィリスは、すぐに当初の目的であった山鳩色の刺繍糸を用いての仕事に取り掛かった。

そして同僚達と『今日妙な人間が保管庫に居てね』などと、ユイカの事を話題にしながら仕事を進め、常と同じように定時まで勤めた。

たわいも無いおしゃべりをしながら、他の侍女仲間達と共に使用人の使う食堂へ向かったのは、仕事が終わった後のこと。

食堂に着いてパンと一緒に蒸し肉とスープ、わずかばかりの果物を受け取ると、フィリスはいつものように彼女達に声をかけてから一人離れて奥の方のテーブルへ向かう。

夕食時に彼女が行動を別にするのは毎日の事なので、その辺りは、同行していた侍女仲間も心得ている。「行つてらっしゃい」だの「先に部屋に帰つてるね」だのと言つた挨拶を交わしながら見送つて

くれた。

広間とも呼べる広さの食堂は、侍女や女官を始めとした使用人たちだけでなく、宿舎住まいだったり夜遅くまで出仕している予定だったり、夜勤を控えていたりする官吏や衛兵も利用している。

大抵は同じ職場に勤めていたり、同じ役職を賜っている者同士が集まっているのだが、中には恋人や友人と待ち合わせて食事を取っている者もいた。かく言うフィリスもその一人である。

とは言っても彼女の場合、相手は友人でも恋人でもなく家族であったが。

「アデル、今日もお疲れ様」

「ん、お疲れ」

侍女や女官達、女性の多く居る辺りを通り過ぎ、比較的官吏たちの多い食堂の奥まった所までたどり着くと、フィリスはぼんやりとパンを口に運ぶ青年に声をかける。

アデル、と呼ばれた淡い金髪の彼は、フィリスの姿を目に留めると、視線を彼女に向けてひらひらと手を振りながら挨拶を返す。司書官の制服に身を包んでいるとおり、青年はこの王城の書庫を管理する者の一人だ。王城内の宿舎を利用する身なので、彼はいつも食堂を利用する時は、フィリスと時間を共有する。

フィリスと同じ十八歳の青年は、本名をアデル・ランベールと言う。名前で察せられるように、フィリスとは家族だ。

続柄で言うと、二人は義理の兄妹である。その間に血の繋がりは無い。

二人ともが孤児なのだ。そして、クロエ・ランベールと言う今は亡き女人に、彼らは嬰兒の時から養われ育まれた。

「いただきます」

「……早いね」

挨拶もそこそこに、即座に席についたフィリスが果物に手を付ける。すると、アデルが珍しい物を見たと言うように、額に軽くかかった金髪の間から、萌黄色の瞳でフィリスに視線を遣<sup>よこ</sup>してきた。

「好物って最後に食べる主義じゃなかった？前フランに力説してたじゃないか」

「時と場合によりけり。今日昼食、食べられなかったの。いきなり肉じゃ気持ち悪くなるでしょ」

「衣裳部屋、そんなに忙しかったの？」

「そう言う訳ではない、と返して、彼女は次いでスープに手をつける。」

野菜の入ったそれを三分の一ほど食すと、フィリスはスプーンを置いてアデルに理由を語りだした。

「今日ね、珍しく保管部屋行ったのよ。昼食前に」

「ふうん？」

「そしたら、そこで不審者見つけて。衛士詰め所に身柄預けてたら、昼食逃した」

「はあ!？」

簡潔にそう話すと、アデルが左手に持っていたフォークで、切っている途中だった蒸し肉を誤ってぐさりと刺した。

けれど彼はそれにも気付かず、目を睨って矢継ぎ早に言葉を繰り出す。

「え、ちよつと、なにそれ。不審者って。フィリス何もされなかった？」

「されなかった。女の子だったし。けど、ケープ持って行かれたわね」

即座に否定すると、フィリスの身に危険が無かった事に、アデルは少しばかり安心したようだった。

例の黒いケープは、ユイカが寒いと訴えてきたので貸してしまっただのだ。彼女は腕も足もむき出しにしていた。

けれども衛士に託した時に返してもらったのを忘れてしまい、ケープはフィリスの手元から離れてしまった。

「妙な服装だったから、衛士詰め所まで連れて行く時に、それ隠す意味も兼ねて持ってたケープ……ほら、黒に萌葱の裏地の奴。アレ

を貸したんだけど、別れ際に返してもらうの忘れちゃって」

「そんなにあつさりと……。いいの？ あのケープ、まじないの紋様を刺繍して埋め込むのに苦労したって言っていたじゃないか」

「あー、うん。そうなんだけれど、そろそろ術式の威力も弱まってきたいたし、替え時かなって」

「そうなの？ まあ、それなら諦めもつきやすいだろうけどさ……」  
単語からすれば深刻な話題であるはずなのに、彼女はこうものんびりと話す。

その事に、少し呆れたように笑ってアデルは言った。彼とてフィリスが不審者に遭遇したと聞いて、心配だったのだ。大切な家族である。

それに半年ほどの差とは言え、養母亡き今ランベール家では最も年長のアデルであったから、家族を庇護すると言う義務感も強かった。

フィリスが今度はパンを取り口に運ぶのを見届けると、アデルもまた蒸し肉の攻略にかかった。

今更ながら、先程盛大にフォークを突き刺してしまったのに気付いて少し眉根を寄せる。

「それにしても、不審者か。何も無かったからいいけれど、物騒な話じゃないか」

フォークを抜いて、今度はきちんとナイフを操り、肉を一口サイズに刻んで。

アデルがため息混じりに呟くと、フィリスは思い出したように、

「その事なんだけれど」と顔を上げた。

「その子、ユイカって名乗ったの。フルネームがイサワユイカ」

「此処や近隣国家じゃ、聞かない響きだね」

「やっぱりそう思う？」

「ああ。ユイカなんて響きの家名は聞かないし、イサワって言う名前も、綴りが浮かばない」

そうアデルが返すと、フィリスは少しばかり声量を落とした。

「違うかもしれないけれど、彼女、召喚されたのかもしれない」  
「……どういう事」

それを聞いた青年の声音も、途端に陰しさを孕んだ。  
召喚、など。

常から聞く単語でもないし、そう平凡な単語でもない。

政治的な観点から見ても、魔術的な観点から見ても、だ。

「気付いたら魔法陣の上に瞬時に移動していて、宮廷魔術師に儀式剣を向けられていたらしいわ」

彼女が語ったのはもっと曖昧な言葉だったけれどね。

そう付け加えて、フィリスはスープを一口飲んだ。

「彼女の話を経合すると、そうである可能性が高いの。加えて彼女は妙な装い……。だから、もしかして魔術師に何処か遠くから召喚されたかな、と」

「なるほどね」

アデルは相槌を打つと、肉の一欠片を咀嚼して嚥下した。

それにしても、宮廷魔術師が召喚魔法を行使とは。何かあったのだろうか。

召喚魔法系統は、元は精霊の用いる様式魔法の一系統である。それが儀式魔法と融合して、三百年ほど前に召喚魔法系統が確立された。

つまりは元々、人のモノではない魔術なのだ。行使には常以上に危険が付きまとう。

それをわざわざ宮廷魔術師が行使するなど、あまり利点が浮かばない。

「まあ、別にそれほど気にする事じゃない。気になるようだったら発表を待てばいいし、発表が無いようだったら気にしない方が得策だ」

アデルが言うと、フィリスも「そうね」と頷いた。

宮廷魔術師。彼らも官吏の一員である。

召喚魔法など、材料費と人件費と時間のかかる魔法の行使を、職

務の成果として発表しないはずも無い。

逆に発表してはまずい事になる場合は、術式を行使したことすら公表しないが、そう言った事に下手に興味を持つのはこちらの首を絞める。どちらにしろ、動かないのが得策だった。

フィリスも蒸し肉に取り掛かり、アデルもスープに手を付け出したので、会話はそこでいったん途切れた。

しばらく、周囲で会話を楽しむ官吏たちの声や、僅かに聞こえる食器のこすれる音が、二人の周囲を支配した。

それに終止符を打ったのは、「そう言えば」と言うアデルの呼びかけだった。

フィリスはほぼ全ての食事を食べ終わり、僅かに残ったスープを口にしている。アデルは果物だ。

「さっき一度宿舎に戻ったら、フランから今週分の手紙が来てたよ」「本当!？」

フラン　フランシスの名を出すと、途端、フィリスが表情に喜色を浮かべた。

「持ってきてる。俺はもう読んだから、フィリスに渡してしまうね」「ありがとう!」

アデルが司書官の纏う、上半身を覆う程度の長さのマントの内ポケットから、一通の手紙を取り出した。

急いで残りのスープを食べ終えてしまい、念のためにハンカチで手を拭くと、フィリスはそれを笑顔で受け取る。

差出人の名は、フランシス・ランベール。先日九歳になったばかりの、アデルとフィリスの義理の弟だ。

義理の、と付くように、やはり二人のどちらもが、フランシスと血は繋がっていない。

フランシスは、二人の養い親であるクロエのたった一人の実子なのだ。アデルとフィリスが九歳の時に生まれ、四年前にクロエが逝って以来、二人を親代わりとしてきた少年。

昨年からは王立学院ウィンデリアに通いだし、学院の寮で暮らす

ようになったフランシスは、離れて暮らす兄弟へと週に一度手紙を送ってくる。官吏であるアデルが暮らす官舎は個室であるが、侍女のフィリスは同僚と共用の四人部屋である。そこを慮おもんばつて、フランシスからの手紙はアデルの元へ届くようになっていた。

「フラン、今度は新しい補助魔法を覚えたんだって」

先に手紙を読んだアデルが、我が身の事のように嬉しそうに言った。

それを聞きながら、フィリスも手早く手紙に目を通す。

そこには、アデルの言ったとおり新しい魔法を覚えた事、友達と小試験で点数を競って引き分けた事、商人を父に持つ同級生から珍しいお菓子を分けてもらった事など、弟の日常が短いながらも用紙ぎりぎりまで綴られていた。

フランシスは、この一週間もまた楽しく過ごしたようだった。長年、フランシスが幼い頃に亡くしたクロエクロエの代わりをしてきたフィリスとしては、嬉しい事である。

「本当ね。今週は返事に苦労しそう。実際に会って褒めたいけれど、文字にしくちやいけないもの」

フランシスからの手紙に、毎週返信を書くのはアデルとフィリスも同じだ。

フランシスは便箋一枚の裏と表に近況を書いてきて、二人は別の便箋の表と裏にそれぞれ返事を綴る。

兄と姉が王宮に出仕しているランベール家ではあるが、将来を考えての貯蓄をしながらでは、王立学院に通う弟の学費を払うのも楽と言うわけではない。

あまり裕福ではないランベール家だからこそ、ちょっとした節約術だった。

「じゃあ、今度休暇でも取ってフランとどこか出かけない？」

果物を食し終えたアデルが言った。

「来週辺り、三日くらいならまとめて休みが取れそうなんだ」

「そうなの？ やった。それじゃあ、少し遠出もできるわね」



一年ほど前にようやく『下級司書官』と言う見習い枠を脱し、書庫を一つ任せられるようになったアデルだ。

ここ最近はずっと長い休みも取れずにいたから、フランスも喜ぶだろう。

「なら、私も明日にでも侍女頭じゆうしに休暇申請しておくわ。衣裳部屋しやうぶの方かたも、仕事がひと段落ついて暇な時期だもの」

「そう、よかった。それなら、返事は休暇について書けばいいね。日程とかはどうする？」

「週末でいいんじゃないかしら？ そうしたら、学院の休日きゅうじつに合わせられる。フランにも何処どこに行きたいか聞いておかないと」

楽しげに言うフィリスを見て、アデルも口元に笑みを浮かべた。

家族で集まるのは、先月のクロエの命日以来である。

久々に家族で過ごす休暇が、楽しみで仕方がなかった。

## 02・・・ランベール家の子供達（後書き）

蛇足ですが、ランベール家の三兄弟は、上からアデル十八歳、フィリス十八歳、フランシス九歳です。アデルとフィリスは、約半年だけアデルの方が年上になります。

目的の扉の前にたどり着くと、女官長はフィリスの方へ振り返る。ユイカに遭遇し、フランスからの手紙を受け取った次の日。フィリスは王宮の西 王族の住まいである一画に居た。

「よろしいですか、フィリスさん。ユイカ様は異なる世界より参られた為に、わたくし達にも優しく接してくださいますが、王女殿下と並ぶに等しい地位のお方なのです。くれぐれも粗相の無いように」  
「存じております。誠心誠意、お伝えさせていただきます」

常套句って便利だ。全くそうは思っていないくとも、真剣に言えば心からの言葉に聞こえる。

そんな事を思いながら、フィリスは扉の前に立つ女官長、マリエールに頷いた。

……何故、こんな事になったのだろう。

アレか。ユイカを発見したからか。それとも彼女は私に本気で同情されていると思ったのか。いや、それだけではないはずだ。では何が原因か。衛士の所に連れて行ったからか。それともケープを貸したからか。

どちらにしろ、原因が昨日の行動の内のどれかである事は間違いない。

フィリスの脳裏を駆け巡るのは、失敗の羅列と後悔の念。  
彼女は思った。

嗚呼。一介の侍女である己が何故、身元不明の第一王子の客人などと言う、面倒この上ない立場の女人の侍女とならなければいけないのだろうか、と。

フィリスが女官長の使いの女官と遭遇したのは、彼女の仕事

場である衣裳部屋での事だった。

身支度を終え、朝食を取って ついでに食堂でアデルに会って、預かっていたフランからの手紙とそれへの返事を渡し 同室の侍女たちと共に南の衣裳部屋へと向かった。

女官長直属の女官は、其処でフィリスを待ち構えていたのである。『女官長から、さる高貴な方のご希望で、あなたを連れてくるようにと命じられました』

黒髪の、見目麗しい女官の一言で、フィリスは王城の南から西へ、つまりは官吏たちの領域から王族の住居へと移動する破目となった。物理的な意味でも、立場的な意味でも。

案内された西宮の一室で、彼女が女官長と対面したのが一刻前の事。

女官長自らに、幾つか所作の確認をされたフィリスは、其処で所属の移動を言い渡された。

即ち、『第一王子殿下の賓客であられる、ユイカ・イサワ様だったのご希望です。あなたは今日から、ユイカ様の専属の侍女となるように』と。

濃い灰色の侍女服を手渡されてそう告げられた時の衝撃は、半端無いものだった。

次いで女官長より説明されたのが、『ユイカ様』は、宮廷魔術師達の術式によって異世界から、このルーデイン王国の第一王子、ベルナール・ロジェ・ルーデイン殿下の元へと召喚された賓客である事。

ユイカ つまりは彼の不審な少女が異世界の人間であり、かつ王子の客人と言う事実。

それに思わず瞳を見開き、眉を<sup>ひそ</sup>顰めかけたフィリスを助けたのは、幼い頃にアデルとの遊びの度に鍛えた、無表情と演技力だった。

そして抗う術も無く、フィリスの移動は完全に決定し、彼女は焦茶色の侍女服から、灰色のそれに着替える事となった。

混乱しながらも脳内で情報を整理して、フィリスが何とか現状を

理解したと同時に、女官長に連れられて『ユイカ様』のお部屋へと歩を進めることとなったのが四半刻前。帰ることも横道にそれる事も許されそうに無かった。まるで、市場へ売られていく子羊の気分である。

「それでは、ユイカ様に対面していただきます」

「かしこまりました」

そう、丁寧な返事を返すと、女官長は一呼吸置いてから、丁寧に扉を叩いた。

此処は王城の西の一角にある離宮だ。正式な名をウェインの離宮と言い、一般には白羽の宮と呼ばれている。

女官長が叩いた扉の先にあるのは、この白羽宮の数ある居間の内の一つ。つまりは現在ユイカの居る部屋である。

「ユイカ様。マリエルです。侍女のフィリスを連れて参りました」  
「ど、どうぞ！」

マリエル女官長が呼びかけると、部屋の中からすぐに、緊張した声で返事があった。

ユイカの物だ。

「失礼いたします」

マリエルがそう言って扉を開いて中へ入ったので、フィリスも半歩遅れてそれに続く。

部屋の中は、白と薄い水色で統一されていた。

白木の家具には水色のシルクや縐<sup>しゅう</sup>子<sup>す</sup>だろうか。艶やかな掛け布がふんだんに使われており、カーテンやソファにもレース飾りがあちこちにあしらわれている。

白は純潔、淡い水色は清い魔力。シルクは清廉、レースは繊細。その様な意味合いも籠められていた気がする。

なるほど、未婚の少女に相応しい内装と言えた。

どれも一朝一夕に用意できるものではないから、おそらくユイカの召喚は前々から計画されていたのだろう。少なくとも、他の何かを呼び出そうとしたにも関わらずユイカが召喚されたと言うような、

突発的なものではない。

その『王子の賓客』であるユイカは、薄い水色のドレスを着てソファに座っていた。声の通り、緊張しているのだろうか。背筋は不自然なほどにぴんと伸ばされている。

その傍らには二十代だろうか、若い金髪の侍女が一人控えており、彼女は此方にちらりと視線を遣ると少しだけ微笑んだ。

「ユイカ様、こちらが今日より専属侍女の一人となりますフィリス・ランベールです。フィリスさん、ご挨拶を」  
「はい」

マリエールに言われて、フィリスは半歩前へと進み出た。

そして侍女服の裾をつまみ、慌てて立ち上がったユイカへ向けて礼をとる。貴人の部屋付きであっても衣裳部屋に控える者であっても、侍女として女官長の見ている前での失態は許されない。母クロエの教育に感謝したかった。

「先の無礼をお許しくださいませ。お召しにより参じました、フィリス・ランベールです」

「えと、ユイカ・イサワです。あの、よろしくお願いします!」

ユイカが立ち上がり、そう答えながら頭を下げようとした。

「ユイカ様」

「……あ! ごめんなさいっ」

すかさず女官長が注意する。仮にも『王女と同格』である者が、格下の者に軽々と頭を下げてはいけない。

「でも、フィリスさんは私の事助けてくれたし……」

ユイカは少し口ごもったが、女官長のたしなめるような視線に押し黙った。

そして僅かに頬を膨らませ、不満そうにどさりとソファに座りなおす。

「ユイカ様、それではお付きの侍女はこの者でよろしいのですね?」  
マリエールが言った。

それに誰より驚いたのは、当のフィリスである。

侍女となる事は告げられてはいたが、貴人付きの侍女であるとは聞いていない。

貴人に使える侍女、と言うのは、大きく分けると二種類に分けられる。

ひとつが、今マリエールが言ったような貴人付きの侍女。

これは貴人の身支度や買い物、外出や遊びを手伝い、簡単な給仕や身の回りの世話をする、貴人の話し相手を主な仕事とした侍女である。

もうひとつが貴人の部屋付きの侍女。

こちらは主に裏方の仕事や雑用を任せられ、部屋の掃除や生活用品の宅配、貴人付きの侍女の補佐を主にこなす者だ。

フィリスは当然、自分は後者であると思っていた。

当然だ。彼女は権力者を後ろ盾に持つわけでも、貴族の血を引くわけでも、特別功績を立てたわけでもない、本当に一般の侍女なのだから。むしろ貴人の部屋付きになる事すらおかしい。

それが、貴人付きの侍女とは。そう言った役目に付く者は、大抵が貴族や騎士の家系であったり、彼らを後見に持つ身元のはっきりとした人々である。間違つても家系を遡って調べる事のできない彼女は孤児であるし、養い親として身寄りが無いのは同じだ。フィリスがそういった役目を賜る事など、常識的に考えればありえなかった。

驚くと同時に、フィリスは呆れた。

誰だ、そんな無理を押し通した輩は、と。

「うん、勿論です！」

ユイカが力いっぱい肯定する。

「左様ですか。ですが、このような事はあまり多い事ではありません。その事を、心にお留め置きくださいませ」

「わかりましたあ。……でも、王子様も良いつて言っていましたよ？」

「それは、ユイカ様がお願いなさったからですよ」

「そうなの？」

……ユイカ、彼女が元凶か。

どうやら王族に頼んでまで、彼女はフィリスを自分付きの侍女にしたらしかった。

正直に言おう。フィリス個人の意見を述べるならば、いい迷惑である。

人事などフィリスが決める事ではないのだが、それでもユイカが王子相手に余計な事をねだりさえしなければ、現状は実現するはずは無かった。

貴人付きの侍女としてあてがわれる個室や、当然大幅に上がるであろう給料を差し引いたとしても、だ。

貴人付きともなれば、勤務時間も増えるし休暇も取り難くなる。

お金も大切ではあるが、それよりも家族との時間を大切にしたいフィリスにとつてはありがたいことではなかった。今までの給料でもやりくりすれば何とかなっていたのだ。第一、仕事も一から新しく覚えなおさなければならない。

それに、突然高位の侍女に任じられた故に引き寄せるであろうモノも面倒だった。

人の嫉みや、ユイカが交流を持つ貴族、その使用人たちとの付き合いである。

万が一不興でも買ったら、最悪の場合、フィリスは仕事を辞めるしかない。それも現在後見人を引き受けているアデルともども、だ。主人であるのは異世界から来たと言うユイカだ。当然、其方と此方は常識も文化も慣例も異なっているだろうから、常であれば存在するであろう彼女の庇護は当てにできない。

そのユイカは「王子様って、やっぱり優しいんだね」などと、感心したように呟いている。

傍らでは金髪の侍女が「その通りですわ」とにこやかに彼女に同調し、次第に空気は緊張を孕んだものから、ほんわかとしたものに変化した。

「ねえ、フィリスさん」



そわそわと、ユイカがフィリスに声をかけた。

「あのね、信じてもらえないかもしれないけれど、私、異世界から来たの」

それは知っていた。

「はい。女官長より伺っております」

「……！　そ、それでね！」

頬に僅かに笑みを浮かべて即答すると、ユイカの表情がぱあ、と明るくなった。

「私、フィリスさんが侍女になってくれて、凄く嬉しいんだ。だって、この世界で初めて、私に優しくしてくれたんだもん」

なってくれて、ではない。フィリスはならざるをえなかったのだ。

それでも彼女はにこやかに、「王宮の侍女として、当然の勤めです」とのたまった。

言葉に棘は感じさせない。

ユイカがますます嬉しそうに笑う。

女官長もフィリスの所作に失敗の類が無い事に安心したのか、最初に比べていくらか柔らかい空気を纏っていた。

「これから、よろしくね！」

「勿論です」

同調を言葉にしながら、再びフィリスは礼をとった。

ユイカ付きの侍女となった事で、来週の休暇は確実に流れるであろう。

フランスにも当分会えなくなるし、家族で遠出もしばらく出来そうにない。

自分も残念だったが、アデルやフランスにその事を伝えなければならぬのがことさらに憂鬱だった。彼らの笑顔が曇るのは見たくは無い。

心底嬉しそうなユイカとは対照的に、フィリスは内心で盛大にため息をついた。

勿論、表面ではにこやかに笑みを作っていたが。

### 03 - - 侍女生活、唐突に暗転（後書き）

愛想笑いとか、仕事する上ではある程度必要だと思います。  
王宮なんて言う、狐狸の巣窟では特に。

ユイカはご機嫌だった。

紅茶を口にしては「美味しい！」と喜び、茶菓子を見ては「可愛くて綺麗」とはしゃいだ。

金髪の侍女の侍女はそれを見てにこにここと笑み、「ユイカ様、もう一杯紅茶をいかがでしょうか？」などと給仕をする。

彼女の名前はカリーヌと言う。カリーヌ・シュザン。当年二十一になるシュザン伯爵家当主の妹で、第一王子ベルナルの乳兄妹だ。女官長マリエールがフィリスを残して去った後、フィリスは彼女もまたユイカ付きの侍女である事を知った。

カリーヌは第一王子だったの希望で、昨日付けでユイカの侍女となったらしい。

自己紹介をした時に、ころころと笑って「殿下のお願いですもの」と言っていた。

さて、ユイカは女官長が出て行った後、早速フィリスに声をかけた。

来てくれて嬉しいという事、あの後、衛士からクロードと言う騎士に引き渡されて、ベルナル王子達と会ったこと、そして自分が《封じの巫女》と言う、王女にも等しい存在だと告げられた事。紅茶をお供にして、彼女はそれらを楽しげに話した。

「《封じの巫女》、ですか？」

「うん、そうなの」

カリーヌと共に、ユイカの望みに応じて茶を共にしていたフィリスは、目を丸くした。

向かいのソファでユイカが少し不安そうに呟く。

「でもね、私、その《封じの巫女》って言うのが何なのか、よく分からなくて。自分のことなのにね」

そう言って苦笑するユイカに、カリィヌが優しく言った。

「簡潔に言えば、悪しきモノを封じ込める、強大な力を操る巫女なのです。《封じの巫女》とは」

悪しきモノ。

フィリスは、無意識に息を呑んだ。カリィヌは続ける。

「封印の術を根本から操る、巫女姫君。フィリスさんも、小さい頃に聞いたことがありでしょう？ ほら、建国王の」

「封印と建国王……『繫鎖けいさの森のルーデイン』ですか？ 御伽噺の？」

カリィヌに話を振られて、フィリスは無意識に祈った。

『繫鎖の森のルーデイン』。どうか、彼女の指す『聞いたことがある』話が、その物語ではありませんよう。

「あら、地域によって呼び名は違うのかしら？ わたくしの言いたいののは、『《封じの巫女》とルーデイン』ですわ。封印の姫君と共に、初代ルーデインが建国なさる」

「それなら、同じ物かと。竜退治のお話ですよ？」

「ああ、そうです。じゃあ同じ物なのね」

そんな期待も外れて、返ってきた返事は肯定。

フィリスは無意識に、きゅっと唇を引き結んだ。

「ねえ、それってなあに？」

一人『ルーデイン』を知らないユイカが問いを発する。

「このルーデイン王国の建国譚の御伽噺ですわ」

カリィヌが答える。フィリスも黙って頷いた。

正直、話すよりも今は思考を整理したい。カリィヌが言葉を紡ぐのに任せる。

「六百年ほど前に、この国は建国されたのです。古くには『繫鎖の森の地』と呼ばれていたこの一帯に、現在のルーデイン王国を建国しました初代ルーデイン王は、湖の向こうのユトユリア王国の末王

子でした」

「ユトユリア？ ええっと、昨日地図で見た北東の方の大きな？」

「そうです。このエゼン大陸は未開の西方を魔性どもが占拠し、東と南は人が国家を築いています。その西端に位置する此処ルーデインは、当時は大半が魔性と竜の領域でしたの。そこから魔性を更に西へと追い払い、住まわっていた竜を退治でこの国を建国したのが初代ルーデイン、ヴァンサン・エリク・ルーデイン建国王なのです」  
カリー又は語る。

「その建国王は。名も知らぬ少女 即ち《封じの巫女》と呼ばれる姫君の手を借りて、魔性を竜を討ち取りて、この安寧の地に人々を導いたと、史書にはあります。それを分かりやすくくいて、幼子に聞かせるようになったのが『《封じの巫女》とルーデイン』なのです」

言葉を区切ると、カリー又は一口紅茶を飲んだ。

「建国王の側には、常に《封じの巫女》の姿が有ったと言います。巫女姫の存在は人々にとって、忌むべき魔を封じ込める心強い戦乙女であると共に、安寧を象徴する母妃でもあるのですわ。そしてその巫女姫の後継であられる当代<sup>げいか</sup>猊下が、ユイカ様、あなた様なのです」

「……わた、し？ 私がそんな凄い人の後継者なの？」

ユイカが信じられないというように言った。《封じの巫女》云々は聞いてはいても、それが何なのかは知らなかったのだろう。

そう、《封じの巫女》とは、人の忌むべき魔性を、『全ての魔を封じ込める』<sup>モ</sup>存在。

世に蔓延<sup>な</sup>り、人に害<sup>な</sup>す魔物や魔族、悪名高い魔王ですら、その手で封印する巫女なのだ。

「ええ。間違いはございませんわ。宮廷魔術師達も『《封じの巫女》を』と条件を指定して召喚したのですし。何よりユイカ様は召喚陣のあった部屋にかけられていた封印結界も、フィリスさんと会ったと言う部屋の窓の封印も、霧散させるように解呪してしまわれた

のですから」

カリー又はにこやかに言う。フィリスもそれにあわせて感心したように微笑むと、ユイカは「そつかあ」と納得するように呟いた。

《封じの巫女》は、封印を操るのだ。施すのも解呪するのも思いのままに。

特に魔に対する威力は拔群といわれ、一般には《封じの巫女》は魔性封じの巫女と同一である。

「確か、二百年ほど前に当時の魔王を封印したのも、先代の《封じの巫女》様でしたね」

フィリスが言うと、ユイカは首をかしげた。

「魔王？ そんなの居るの？」

「当然ですわ。魔性の族にも王は居ます。人々を苦しめる魔物や魔族を、<sup>あまね</sup>遍く纏め上げ、率いているのが魔王なのですから」

カリー又が、その碧眼に柔らかな光を浮かべながら無邪気に言った。

ユイカはその言葉にも驚いて、「ここって、魔法だけじゃなくて魔物も居るんだ！」と目を瞠る。

「でも、人に害為すって、言ってたよね？」

一瞬の沈黙の後に、ユイカは不安げに聞いてきた。

「そうですね。この城や王都は宮廷魔術師の結界により、日夜守られてはいますけれど、大半の街や村にはそんな物はありません。街道を旅する時なども、魔物に遭遇しやすいですね」

「魔物は人を傷つけるの？」

「ええ、まあ。傷つけるといふよりは、喰らう、と言った方が正しいですが」

「そんな……」

フィリスの返す答えに、ユイカはますます哀しげに眉根を<sup>ひそ</sup>顰める。かしゃりとユイカは茶器をテーブルに置き、何かを考え込むようにうつむいた。

「この世界って、私の居た所みたいに平和じゃないんだね」

「ユイカ様のいらした世界は、平和だったのですか？」

この国は、ここ数十年は大きな戦火も無く、平和な時代といわれていた。十年ほど前に、国全土で疫病が流行った事や、北方には飢饉の訪れた地域もあつたが、その他は特別に大きな災いも無い。

そんなルーデインよりも、彼女の国は平和なのか。

カリーヌが尋ね、ユイカが語りだすに、フィリスは耳を傾けた。

「うん。魔物なんか居なくて、やっぱり魔法なんかも無いんだけど、代わりに科学って言う技術が発達していたの」

それがユイカの、故郷の世界。

「国が何百もあつて、その中には危険だったり貧乏だったりする国もあるんだけど、私の住んでいた『ニホン』って言う島国はとっても平和だったんだ。武器を持ったりしちやいけないから。危ないものを持っていたり、危ない事をする人は、ケイサツが捕まえてくれるから、みんな安心して暮らせるの」

『ニホン』。

フィリスはその国の詳細に、驚いたようにユイカを見て、無意識に言葉を発した。

「ケイ、サツ？」

「あ、えーと、こつちでは警備兵って言うのかな？ そんな感じの人たち。国の役人なの」

ユイカは言葉を置き換えて、解説を入れながら続ける。

「私は元の世界では学生で、コウコウって言う学校に入ってたばかりだったの。向こうは夏だったなあ。学校が終わって、晩御飯の時間まで家でパソコンで小説読んでたら、突然この世界に喚よばれたんだ」

コウコウ、パソコン。

この世界には存在しない単語に、フィリスはひゅっと息を呑んだ。ルーデインよりも、ユイカの世界は遥かに平和らしい。

カリーヌは、懐かしそうに語られるユイカの日常を聞いて、いたわしげな視線を彼女に向けている。



「そうだったのですか……」

「うん。でも、魔を封じるのが私の役目なら、この世界で皆を守る事が私のやるべき事なら、私はそれをやり遂げたい」

「ユイカ、様」

「家族や友達ともうまくいつてなかったしね。向こうでたらだら学生してよりも、むしろ、私を必要としてくれているこの世界にこれてよかったかも」

「心強い限りですわ」

「カーリー又がその献身的な決意に感動したと言ったように口元を覆った。」

「フィリスは動けないままで、それを見ている。呼吸をするのももどかしい。」

決意を固めたように、ユイカは力強く頷いた。

「私、頑張るね。《封じの巫女》の名に恥じないように、魔王も魔族も魔物も、できるなら全てを封じて、この世界のみんなに安心してもらいたい」

気の強い笑みを浮かべて、ユイカは誇らしげに言った。

何故、そこまで思うのか。

それを見たフィリスの脳裏を駆けしたのは、そんな言葉だった。

何故、それほどまでに。懐郷を欠片も語らないのか。

「故郷に帰りたいとは思わないのですか？」

フィリスは恐る恐る聞いた。

そして、ユイカから返ってきた言葉。

「そんな事よりも、この世界が平和である事の方が大事だと思うの」

「私一人の幸せよりも、みんなの幸せだよ……。」

そう笑って言ったユイカの言葉に、ゆっくりと、フィリスは瞳を瞬く。

いや、瞬きと取られるだろうほどの時間だけ、フィリスは息苦しいほどに重くなった体を休めるように瞑目した。

「そう、ですか」

空気を震わせて、発声する。

もしかしたら声は擦れていたかも知れないが、その事にかまえるほど、余裕は無かった。

故郷へ。

故郷へ、帰りたいと。

帰還が叶わずとも、せめて今ひとたび故郷の家族と見えたいと。ずっと願っていたその女人<sup>ひと</sup>を、フィリスは識<sup>し</sup>っている。

フィリスに家族をくれた女性。

優しい色をした彼女の言葉は、もう耳にすることは無くとも、忘れてはいない。

『一度でいい。帰りたいのよ、家族のために』

彼の人は、あんなにも故郷へ帰りたいがっていた。

けれど戦火が彼女の帰路を閉ざして久しく、切望した帰還も叶わずに、とうとうあの日逝ってしまったたたやかな女人<sup>ひと</sup>。

その彼女を、知っているからこそ。

「心配しないで、フィリスさん。私、帰ったりなんてしないから」  
笑ってそんなことを言うユイカに、どうしてもフィリスは親しみをもてなかった。

#### 04 - - 繫鎖の森のルーデイン（後書き）

お気に入り登録をして下さっていたり、読んでくださっている方が居るようで、とてもありがたいです。

それにしても、そろそろ計5話になるのに出てきている男性がアデルだけとか。逆ハーレム傍観のはずなのに、その逆ハーレム要員が中々出てこないと言う。早く話を進めたいです。

「フィリスが？」

「そうなんですよ。あの子、何かあったのかしら」

さて、一方アデルは若い侍女の言った言葉に驚いていた。

正午、食堂での事である。今は昼食の時間だった。

彼は来週の休暇の予定について話をしようと言うことで、昨夜のうちにフィリスと待ち合わせていたのだ。

その時間に間に合うよう昼休みを取って、アデルは指定の場所で食事をしながら待っていたのだが、しかしフィリスは一向にやって来ない。

忙しいのか、それとも昨日のようにまた何かあったのかと心配になったアデルは、食事を終えるとフィリスの同僚を探した。

するとすぐに、二、三度顔を合わせたことのある侍女を見つけたので、彼女にフィリスの所在を尋ねたのだ。

「それがあの子、朝の内に女官に連れられてどこかへ行ってしまったんです」

そして、返ってきたのがこの返事。

周囲の他の侍女たちも「そう言えば」と、一斉に話に加わってきて、アデルは少し戸惑った。

「何でも、さる高貴な方のご要望？ とかで」

「本当、大丈夫かしらね。侍女頭様も行き先について詳しくは知らないっていうし」

「何かまずい事になってないといいけれど」

「でも、その『高貴な方』がわざわざ招くくらいだし、悪いようになつてるとは限らないんじゃない？ ほら、『高貴な殿方』って事も

あるし」

「え、何それ。それってあの子が目を留められて、女官を使って呼ばれて……って事？」

「それは知らないけれど。と言うかその予想行き過ぎじゃない？」

……つと、ごめんなさいね、恋人さんの前で」

ぱつと話題に飛びついてきた侍女たちに気圧されていると、いつの間にかそういう流れになっていた。

アデルは慌ててそれを否定する。

「いや、そうじゃなくて俺は義理の兄で……。まあ、心配なのはどちらにしろ変わらないけれど」

けれどやはり衣裳部屋の侍女たちの推測を不穩に思ったのか、彼は不安げにもう一度尋ねた。今度は新しい話題に食いついた侍女たちのおしゃべりが始まる事も視野に入れて。

「その女官の方の所属って分かりますか？」

「ああ、多分後宮勤めか伯爵以上の貴人付きね」

「そうそう、黒地に紫黒の紋様入りだったもの、女官服」

「あら、珊瑚と銀鎖の装飾持ちじゃなかった？」

「じゃあその女官、姫君のお付きね。よかったわねー、お義兄さん<sup>にい</sup>

「姫君付き？ 最低でも伯爵令嬢以上の？ 何でそんな方の女官が

…… 本当あの子どうしちゃったのよ」

その後は想像や予測の言葉が侍女たちの間を飛び交った。

アデルはそれをしばらく聞いていたが、やがて折を見て礼を言う  
と彼女達から離れていった。

喧騒から逃げるように食堂の席の間を縫い歩き、やがて廊下に出  
てからは職場である書庫を目指す。

「本当、まずい事になってないといいけれど……」

誰かとすれ違っても聞こえないほどに小さな声で呟くと、軽く息  
を吐く。

何しろ昨日の今日である。

偶然かもしれないが、召喚されたかもしれない少女に遭遇し、同

時にまじないの施されたケープを無くした、その次の日の事なのだ。もしやケープが魔術師か誰かの手元に行ったのだろうか。それとも例の召喚少女が何か良からぬ者で、その発見した時のことを詳しく話す為とか、そう言う事だろうか。

いや、しかしフィリスを連れて行ったのは姫君付きの女官であると聞いた。姫君と魔術師と召喚。関係が無いわけでもないが、あまり関係無い気がした。

しばらく悩んだ結果、アデルはやがて考える事をやめた。情報が少なすぎる。

何かしらまずい事になっていたとしても、今のアデルにはどうしようもない。官吏と言っても、所詮実権の無い下っ端である。書庫を一つ任されているとは言え、それも司書官の慢性的人手不足が原因だ。

さて、アデルの職場は言わずもがな王城内の書庫で、これは王城の北西よりの十数部屋を占めていた。

史書や資料は勿論の事、学術関連から魔法関連まで幅広い種類の本が納められている。しかしこれも外部にある王立図書館の蔵書に比べれば少ない方だ。図書館は建物を丸々三棟分、蔵書の保管に当たっている。

アデルの担当である第八書庫はどちらかと言うと西寄りで、主な出入り口も人通りの少ない廊下の片隅にあった。

所蔵しているのは儀式魔法や様式魔法、魔法形式及び魔法史に関する文献だ。つまりは殆ど閲覧者の居ない分類の本ばかりである。

主な利用者は王室お抱えの歴史学者や、王立研究所やら王立学院やらに勤務する職員で、彼らは隣の史書の多い書庫に所蔵しきれなくなつて、第八書庫に移ってきている書籍がお目当てだった。

殆ど伝承本と言っても差し支えの無いほどに古い、グランヴェーダ暦の発生以前の古文書級の書物である。今年はグランヴェーダ暦795年であるから、およそ八百年も前の物と言う事になる。しかし中には王立図書館にも所蔵していない稀少本がまぎれているのだ。

本来の利用者であろう宮廷魔術師達は、日に三人ほども来ればいい方で、一度など一週間以上魔術師の姿を見かけなかった時もあった。それほどに現在、儀式魔法や様式魔法と言った、まじないに近い古い魔法の系統を研究し行使する魔術師は少ないのだ。

アデルは持ち場に帰り着くと、書庫内をある程度見渡せる位置にある、司書官の机の椅子に座った。

窓の側、日差しの当たるそこは暖かい。今日のようなうらかな陽気の日、司書官の制服である、肩から腰までを覆うマントを羽織っているのがもどかしかった。昨日のような肌寒い日にはありがたい代物なのだが。

たかがマント、されどマント。ケープのような形状のそれは、常時机に座っているわけではない。書架で本を整頓している時もある。司書官を、利用者が見分けるための目印でもあった。

本の貸し出しには、身分証明と許可証に加え、其々（それぞれ）の書庫の管理者の許可が必要なのだ。

それは研究者であつても学者であつても、極端に言えば国王であつても同じ。だからこそ司書官が誰か分からず本を借りる事ができない、と言った事態が起こらないように、司書官はその独特の装飾の付いたマントを職務中は常に纏う事が義務付けられている。

「そこな司書殿」

書籍目録の補完しようかと、アデルが用紙に手を伸ばした時だった。

珍しく宮廷魔術師ではない魔術師が、書棚の間から出てきて声をかけてきた。

禁書指定の本を集めた書庫でなければ、許可証と身元さえしっかりしていれば、外部の人間も書庫を利用できる。彼もその一人なのだろう、馴れぬ様子で数冊の本を抱えていた。

「何でしょう」

「この本を借りたいのだが……」

「わかりました。書名と必要書類を拝見してもいいですか？」

「ああ」

魔術師は机の上に四冊の本を置くと、胸ポケットから許可証を取り出した。

先の宮廷魔術師長であり、一年ほど前に亡くなったデシャン翁<sup>おう</sup>執筆の『戦術魔法変遷概論』、『魔法学術と史的な術式形成の併用』、『学者シャルパンティエ<sup>へんさん</sup>編纂の』『伝承史における形而上のルーデイン』、『そして稀少本である』『封印術式と結界術式の研究報告書』と言う、百年ほど前の著名な宮廷魔術師ル・コントの著作だった。

どれも手に入りにくいと言うだけで、禁書指定ではない。アデルは魔術師から許可証と身分証明書も預かって確認すると、すぐに貸し出し手続きを始めた。

「どうぞ。貸し出し期間は二週間、持ち出し可能範囲は王都の城壁内部のみになっています。範囲以外に持ち出しますと警報を始めとした幾つかの妨害魔法が作動しますので、ご注意を」

「わかった。ありがとう」

魔術師は礼を言うと、許可証と身分証明書、そして自分の借りた本を受け取って、のんびりと書庫から出て行った。退室の際、名残惜しげに振り返って書棚を<sup>いちべつ</sup>一瞥する。

けれどそれ以外特に変わった行動も見せずに、魔術師は書庫から去っていった。

何だか、餌を目の前におあずけをくらった子犬のような後姿だった。よほどこの書庫の本に未練があったのだろうか。

それほどまでに本に　それもこの書庫の本に執着する人間など珍しかった。

何となく可笑しくなつてくすりと微笑むと、アデルは今度こそ目録補完の作業に取り掛かった。

数人の学者が今日も幾つかある書庫の机で文献をあさったり、書架の間を行き来している。

時折人が入れ替わり、アデルも何度か貸し出しや返却の処理をした。



けれど、二時頃であろうか。目録補完の仕事にもひと段落ついた時、この第八書庫へ訪れる、その理由がいまいち推測できない人物が、アデルの元を訪れた。

「フィリス？」

書架の間にひっそりとある、裏手の扉。

そこから姿を現したのは、先程昼食時の待ち合わせに現れなかった、ランベール家の長女だった。

アデルは彼女が室内に入ってくるのを見ると、驚いて咄嗟に立ち上がり、早足で駆け寄った。

フィリスもまた扉を閉めてアデルの方へ歩を進めてくる。

「……どうしたの。何が有ったわけ」

そして常の焦茶色の侍女服ではなく、濃い灰色の侍女服を纏っているのを目に留めると、アデルは不穏ささえ感じられるほどに声を険しくして声をかけた。

「何って……ああ、まあ、それはもう色々有ったわよ」

対してフィリスはため息混じりにこぼす。

「時間が無いから要点だけ言うわね」

そして軽くアデルのマントの端を握ると、声の大きさを落とした。「まず、私、衣裳部屋控えから貴人付きに異動になったの。詳しくは後で時間見つけて説明しに行くわ」

アデルは軽く衝撃を受けたように瞳を見開いた。

無意識にこぶしを握る。フィリスは次の言葉を繋げた。

「次に、昨日話した例の召喚されたかもしれない女の子。彼女の出身 『ニホン』 ですって」

「どう言う事。……そんな国、此処には存在しないはずだ」

「そうよ。存在しないの。つまりそう言う事よ、厄介な事に」

アデルの言葉を遮って、フィリスは続ける。

アデルは尚も言葉を募らせたかったが、ゆっくりとこぶしを解いて発言する事を保留した。

フィリスは本当に困ったと言うように、軽く瞑目した。

「それで、彼女　ユイカ・イサワって言うのだけれど、宮廷魔術師によって召喚されたんですって。今はユイカ様って呼ばれているの。ベルナール殿下の賓客だから」

更に声量を落として、囁くように言う。

「なのに、今侍女を一人連れてこっちに向かってきてる。第八書庫を利用したいんですって」

「王子の客が？　自ら？」

「そう。私はその先触れ。許可証も身分証明書も、今日の昼に一緒に食事をした王子から貰ったみたいよ」

「此処の何が読みたいわけ？　第一、どうして侍女に取りに行かせないの？　警備引き連れて書庫に来るつもり？」

「自分で探したいそうよ。読みたがっているのは《封じの巫女》伝承関連の本。警備は　自分に警護の者が付いているとは思っていないの」

そこまで矢継ぎ早に会話を続けた時、先程フィリスが閉めた扉が音を立てて開いた。

「彼女よ。ごめんね、きちんと答えられなくて」

「いや、仕方ないだろう。……その代わり、後でしっかり伝えてよね」

「勿論。ありがとう」

そこまで言うと、フィリスはアデルから離れてユイカの方へ振り返った。

アデルは視線をフィリスとユイカ、そして彼女の側の金髪の侍女の方へ向けた。

## 05 - - 王宮の書庫の昼下がり（後書き）

文字数の割りに展開が遅いですね。早く進めて書きたいところを書き始めたいのですが、つい細かい所を描写していると文字数がかさんでしまいます。

「伝承関連はこちらの棚に。史学になると第六書庫の方が充実していますが……お探しの書は《封じの巫女》関連の本でしたか？」

「そうです！」

「その手の資料はあまり置いていませんが、こちらの三冊ならば詳しく取り扱っていたかと」

書棚の間で立ち止まったアデルは、天井まで高く聳<sup>そび</sup>える棚の一つから、題名も著者も異なる三冊を取り出した。

無論本の全てに目を通してあるわけではないが、書物の概要くらいならば、前任者が残していた資料がある。

アデルは一年余りの時間をかけて、それに目を通していた。幸いこの書棚の本についての資料には、一月ほど前に目を通したばかりだ。迷わずに選ぶことが出来た。

三冊の本をユイカに渡せば、彼女はそれを受け取って、興味深げに表紙を見つめる。

そして、彼女は「ありがとうございます！」と顔を上げると、小走りで書棚の間を駆け抜けた。侍女二人が待っている、資料閲覧用の机の方へ行く。

まさか本当に、王子の賓客自らが書庫を訪れるとは。アデルはどうやら警備を離宮に置いてきたらしい、ユイカの後姿を目で追った。黒に近い茶色の髪が背で揺れる。

ユイカが金髪の侍女　先程フィリスがカリーンと言っていたか、彼女に促されて椅子に腰を下ろすのを見届けると、彼は視線をフィリスに移す。

偶然にも、彼女の藍色のそれと瞳が合った。

本当にアレがそうなの？ と、そんな思いで眉根を寄せて軽くユイカの方を示すと、フィリスは困ったように微笑して頷いた。きちんと伝わっていたのかそうでないかは定かではないが、物心つく前から一緒に暮らしてきた家族だ。伝わっていると思いたい。

アデルはユイカの所望の本を取ったために、書棚に空いた箇所が出来ていた。軽く本の並びを整えてその隙間を目立たなくすると、アデルは司書官の机のへと向かおうとした。

「何これーっ！」

けれど響いたユイカの声に、苦虫を噛み潰したように一瞬表情を歪め、すぐさま進路を変更する。

「ユイカ様？ どうかありませんでしたか？」

カリー又が心配そうに、ユイカの顔を覗き込んだ。

アデルもまた、ユイカが三冊の本の頁を次々と、少しばかり乱暴に捲り続けるのを見て、表情には険しさが増す。

「書庫ではお静かにお願いします」

机を挟んで、椅子に座るユイカの向かいを通り過ぎざま、少しだけ立ち止まってアデルは言った。

「それと、本は丁寧に扱ってもらえますか？ 稀少本も多いので」

ただしユイカではなくカリー又に向けて、だ。

無位の司書官が貴人に直接口をきくなど、相手から声をかけられない限りは普通は許されない。

カリー又もまた貴人ではあったが、彼女は今はユイカの侍女。私人としてはともかく、公人としての今の彼女の立場は貴人付きとは言え『侍女』である。

『官吏』であるアデルは、身分の格は『侍女』よりも上だ。カリー又にならば自分から話しかけることができた。

勿論フィリス相手でも同様だったが、彼女はユイカから一步下がつて壁際に控えている為、この場合あまり意味が無かった。

「あ、ご、ごめんなさいっ」

焦ったように返事をしたのはユイカだった。

「でも、文字が読めなくて、焦っちゃって」

しかし声量はあまり下がっておらず、彼女の言葉は周囲に響いている。

文字が読めない。その言葉に、アデルはユイカの手元の書物にちらりと視線を遣った。

「ああ、少々古い綴りを使っていますね。そちらの書ならば大半が現代語で記されていたと思いますが」

古い、と言っても何を意味する綴りなのか分からないほどではなく、前後の文脈から推測する事でどうにかなる領分だった。

それを承知で他の一冊を指し示すも、ユイカから返ってきた答えは同じ。

「あ……。それも、何て書いてあるかわからなくて」  
声は少し弱弱しかった。

どうやら文字が読めないらしい。文字が読めずに、どうやって本を読むつもりだったのか。そう疑問には思ったが、アデルはそれを表に出さずに「そうですか」と流した。伝聞ではあるが、前例を知っていたからだ。

それはフィリスも同様で、カリィヌが大げさなくらいに目を瞠ったのとは対照的に、彼女は少し驚いたように眉を動かしたただけだった。

「話している言葉は分かるのに……」

不思議そうに、ユイカは呟いた。そして不安げにぱらぱらと、今度は幾分か丁寧に本の頁を捲ってゆく。

ユイカのため息交じりの言葉は先程の一言も有ってか、しんと静まり返った室内に、思いのほか大きく響いた。

静かに資料を読み解きたい者にとって、一定以上の人の声や物音は、雑音以外の何物でもない。

実際そう思った利用者も多かったのだろう、あちらこちらから聞こえていた、紙の擦れる音が数秒間だけ止む。

書庫に広がった静寂と同時に、近くの机で宮廷魔術師が一人、苛

立ったようなため息と共に大きく椅子を引いた。

「ここは書庫なんだが。少しは静かに出来ないのか？」

栗色の髪に、茶色の瞳の青年。ゆったりと纏っているのは薄い青の装束。

彼は定期的にこの第八書庫に訪れる、数少ない魔術師だった。まだ年若く、確か今年で十九　アデルたちよりは一歳だけ年上だったと記憶している。

椅子から立ち上がった、つかつかとユイカの方に歩み寄ると、青年は机に広げられた書物を一瞥して鼻で笑った。

「このくらいの綴りや単語、常識の範囲じゃねえか。お前、どれだけ阿呆なんだ？」

馬鹿にしたように魔術師が吐き捨てる、ユイカは羞恥でか怒りでか、かあつと頬を紅く染めた。

「な、私だつて字くらい読めるよ！　英語だつて得意なんだから！」

ユイカがばんつと机を叩き、立ち上がって反論する。

「エイゴ？　そんな学問聞いたこと無いっての。大体、お前今自分で読めないって言ったばかりだろ」

「はあ！？　あなたこそ英語も知らないって、馬鹿じゃな……あつけれど二言目で、何かに気付いたように口をつぐんだ。

ユイカの繋げた言葉の流れからして、エイゴを知っている、とは、ユイカの価値観では識字と同じように常識的な事なのだろう。

けれど、ルーデインには『エイゴ』などと言うものは無い。つまりはそういう事なのだろう。ユイカはそれに気付いたのだ。

しかし、そんなわけの分からない物を知らないと言う事で馬鹿にされた魔術師の青年は、明らかに機嫌を損ねていた。怒っている。

「馬鹿はお前だろ？　この国の文字も読めない、常識も守れない」

「常識って、私はそれくらい守れてるよ！」

「　書庫で騒がないって、常識だろ！」

「では、お静かに願えますか？」

殆ど怒鳴り合いにまで発展した二人の会話を、静かな声で制した

のは第八書庫の司書官だった。

カリー又は威勢よく言い返すユイカにおろおろとしていたし、フイリスは立ち位置を動かずに、どうしたものかと思案していた。二人とも侍女であるのだ。下手に会話に割り込めない。

「他の利用者の方の迷惑にもなりますから」

だからこそ、アデルは渋々と言ったように口を開いたのだ。

眉根をしかめた研究員や、口角を下げた学者達から、ユイカと魔術師の青年へと苛立ちの眼差しが集まっている。

「……悪かった」

「う、ごめんなさい」

苦虫を噛み潰したように、当事者二人は謝罪した。今度は小声で、  
だ。

他の利用者達は静寂が回復される兆しに、それぞれ其々の作業に戻ってゆく。

けれど少女と魔術師の二人は、お互いに気持ちは荒立ったままのようだった。二人が二人、同時に謝罪を口にした相手を睨んだり、不機嫌そうに見下ろしたりと忙しい。

「ランベール」

最終的に、その無益な行為を先に終わらせたのは、栗色の髪の宮廷魔術師だった。

瞬間的に、**勝った!** と言うように明るい表情を浮かべたユイカを、呆れたように瞥見べっけんすると、彼はアデルの方を向いた。

「この本の貸し出し、師匠名義でよろしく」

持っていた一冊の、重厚な装丁の本を手渡す。

「わかりました。では、エルディー魔術師長からの委任状と貸し出し許可証の提示を」

「ほら」

アデルもまたその不毛な争いの終了が望ましいと思っていたのだろうが、すぐに本を受け取り、書類の確認を始める。

一度司書官の机に戻って事務手続きを終えると、彼はすぐに証書



と本を若い魔術師に返した。

ユイカはむつとしたようにそれを見守る。特に動かなかったという点は、二人の侍女も同様だった。

「確かに確認しました。貸し出しについての説明は必要有りませんか？」

「当然。ありがとな、ランベール」

「いえ。長殿にもよろしくお伝えください」

「ああ」

そう言つと、青年は薄青のコートの裾を翻<sup>ひるがえ</sup>して、主な出入り口として使われている扉の方へ去っていった。

かつかつと言う靴音が僅かに響く。

ユイカは不機嫌そうにそれを見送ると、「何あいつ」と、苛々と呟いた。

「そりゃ、こつちも悪いかもしれないけど、あんな言い方しなくたっていいじゃない」

むう、と頬を膨らませて、彼女は青年の去っていった方を軽く睨んだ。

カリー又はユイカの斜め後ろから、彼女が広げたままだった三冊の書物を整頓しにかかる。

「確かにそうですね。口が悪いのも考え物ですわ」

「本当だよー。ねえ、アデルさん。あの人、一体何なんですか？」

ユイカは話題をアデルに振った。

三冊の本をユイカに提示したよりも前の事だ。

「私、ユイカ・イサワって言います。えっと、どちら様ですか？」

「この書庫の担当官です」

「んー……お名前は？」

「アデル・ランベールです。司書とでも呼んでください」

と、そう言ったやり取りをして以来、彼女はアデルを名前で呼んでいる。

格が上のユイカから話しかけられたアデルは、しゅしゅながら答

えた。本来ならば、職務に必要な最低限の物以外、書庫での会話は遠慮したいのだが。

「エドワール・リシユリユー殿です。宮廷魔術師の。よく師であるアンセルム・エルディー宮廷魔術師長の代理として、この書庫を利用されています」

質問を繰り返されないように、アデルは最低限の情報を早口で告げた。

「え、でも、私とそんなに変わらないくらいの年齢だったのに」

「十五を過ぎれば大抵の者は何かしら仕事を任せられますが。宮廷魔術師もそれは変わりません」

「じゃあ、尚更だよ。きちんとしたシャカイジンが、あんなに言葉遣いになってないってどういうこと？」

けれど、ユイカの疑問や意見は中々尽きる事がなかった。

本格的にこの場でおしゃべりでも始めようと言っのだろうか。この場に居る者は皆、利用者も含めて職務中だというのに。

とうとう困ったような表情を浮かべたアデルにカーリーヌが気付いたのか、少女へ向けて「ユイカ様」と声をかける。

「書物が読めないのならば、先んじては文字を練習する所から始めませんか？ 王子殿下にお願いすれば、教師を紹介してくれるでしょう」

それに、私達も教える事ができますし。

カーリーヌがそう付け加えてユイカに告げると、彼女は少し不満そうではあったが、「んー、そうだね」と納得したように頷いた。

「では、白羽宮に戻りましょう。あちらにはペンも紙も有りますから」

「そうなの？」

司書官に申請すれば、この書庫でもペンとインクは貸し出しているのだが。

しかしカーリーヌも警備のしつかりとした離宮に、一刻も早くユイカを連れて戻りたいのだろう。アデルにもユイカを引き止める理由

は一つもなかったし、その事を言い出しななかった。

「でも、あいつ、何であんなに失礼な事……」

けれどユイカは、まだぼつぼつと会話を繋げようとする。

「リシユリユー殿の事でしたら」

この場でまた静寂に漣なみを立てて欲しくなかったアデルは、咄嗟にフィリスを生贄に差し出すことにした。

「フィリスも彼の事は知っていますよ。私もフィリスも、彼の後輩に当たりますから。……フィリスも憶えてるよね？ あの人の事」  
後方に控えていたフィリスが、自分に話題を振られたことに驚いて瞬きをした。

アデルとフィリスの卒業した、王都のフィオネイア学院。エドワールもまた、その卒業生なのだ。在学中には多少だったが交流もあった。

「ええ、まあ。ユイカ様、此処は基本的に私語厳禁です。私でよろしければ、離宮の方でリシユリユー先輩について多少お話できますが？」

カリーヌとアデルの意図を汲み、フィリスは前へ進み出てユイカに言った。

三人の視線がユイカに集まる。

「そうなの？ じゃあ、今日は戻ろうかな」

少し考え込んで、ユイカは頷いた。

しぶしぶながら、といった風ではあったが。

ほっとしたと言うように、誰かが安堵のため息をついた。

アデルかフィリスかカリーヌか、それともたびたび読書を邪魔されていたほかの利用者の物か。それは定かではなかったが。

## 06・・・書と文字、及び魔術師（後書き）

ちよつと忙しかったのと沈んでたので、更新が遅くなりました。やつと男性キヤラを出せました……よかったです。次の話では、少しだけでしようがもう二人ほど出せるかと。

また、おかげさまで先日、PVアクセスが5000を、ユニークアクセスが1000を超えました。この小説を読んでもうくださっている皆様、評価を下さった方々、本当にどうもありがとうございます。とても嬉しいです。

くだらねと続いていくであろうこの小説を、これからも読んでくだされば幸いです。

## 07 - - - 召喚少女と王子の晩餐

書庫から戻った後、ユイカは午前中の茶会の延長と言うように再び茶を所望し、フィリスは宮廷魔術師エドワール・リシュリユーについてユイカに話す事となった。

エドワールとはフィオネシア学院で一学年差の先輩と後輩であった事。

彼は学院の普通科を卒業した後、フィリスが侍女として王宮に上がったのと同じように、専門課程に進まなかった事。

そして当時の宮廷魔術師長オディロン・デシャン師の弟子であったアンセルム・エルディー魔術師に弟子入りした事。

学術に対して独特の発想をする青年で、学院では教授と対立しがちだった事。

しかし魔術師に弟子入りしてからはその奇才を発揮し、師匠であるエルディー師の研究の手伝いもしている事。

学院を卒業してからは特に交流も無かったので、主に語ったのは在学中に聞いた問題児としての彼の噂が大半だった。

ユイカは「あー、才能と師匠の七光りがあるから、何やっても許されてるって奴だね」と、一人納得していた。

また、フィオネシア学院とは何か？ など、エドワールの他にも知らなかった事柄があったのか、質問は魔術師の事だけに留まらなかった。午前中の茶会でも様々な質問をしていた彼女は、好奇心旺盛らしい。

フィオネシア学院は王都に学び舎を構える、主に十歳から十八歳までの少年少女を受け入れている教育機関である。数あるルーティン国内の学校の中でも、知名度は五本の指に入る。

生徒の種類は大きく分けて四学年ごと、二つの区分に分かれており、入学から四年間は全ての生徒が一般教養や学術を学ぶ『普通科』に属している。

約半数の生徒がこの普通科卒業と同時に学院から去っていくのは、残りの四年が主に専門課程での勉強になってくるからだ。

フィリスはオディロン・デシャン魔術師の後見で、普通科卒業と同時に侍女として宮廷に出仕したが、アデルは一年だけ専門課程の一つである司書科に進んで資格を取得し、同魔術師の後見の下、閑古鳥の常在している王宮の書庫に就職した。

その辺りの事情まで話したのは、ユイカが退屈だと言って話をねだってきたからだった。

文字の学習はどこへ行ったのやら、しかしどうやらこの国の日常や常識的な話の方が彼女には面白いらしい。

「それなら明日やるよ」と言つて、ユイカは結局夕暮れまで、フィリスやカリリーヌに話をねだっていた。

しかしそれも、第一王子が白羽の宮に訪れるという、先触れの侍従がやってくるまでであつたが。

ルーデイン王国の世継ぎと目されているベルナル・ロジェ・ルーデインが白羽の宮を訪れたのは、日も沈みかけた夕暮れの食事時だつた。

先触れの訪れから王子の来訪までは、一刻ほど時間があつた。先触れとは本来そう言うものである。

ユイカはその一刻の間に身仕度を整え、離宮の裏方では他の離宮付きの侍女達が、王子をもてなす準備を整えた。

白羽の宮にベルナル王子がやってきた時、彼が伴っていた護衛は騎士が一人だけだつた。

護衛は剣を佩いた濃い茶色の髪の騎士で、どうやらユイカともカリリーヌとも知り合いだった。

ユイカは王子の後ろに騎士の姿を見つけたとたん、「あ、クロードさん」と微笑んだし、カリリーヌも彼に軽く会釈をすると、慌てて

王子をたしなめにかかったのだ。

当然ながら王子とも騎士とも面識の無いフィリスは、ユイカの脇に控えて大人しくしていた。今朝まで彼女は衣裳部屋付きの侍女だったのだ。官服の修繕や仕立てのために訪れる官吏たちならまだしも、王子や騎士なんて式典でもない限り見掛けもしない。

「仕方が無いのです。巫女の事はまだ、本当に限られた者にしか知らせるわけにはいきませんから」

明るい赤毛の王子は、困ったように微笑んで乳兄妹に言った。

彼は絵物語に出てくるような、王子らしい王子だった。

市井の絵物語の王子のように金髪でこそなかったものの、その緑の瞳は森を思わせる静謐さを宿しており、胸元辺りまで伸ばされた金に近い直ぐな赤髪は、肩の上で緩く結わえられていた。巷の夢見る少女達が思い描くように、まさしく白馬やら薔薇やらが似合いそうである。

「それとも、我が騎士の腕に不安がありますか？」

「意地悪を仰らないでくださいまし。そんなはずはありませんわ」

二人が並んでいるさまは、さながら一幅の絵画のようだった。揃って美男美女なのである。

そんな風に少しだけカリリー又と言葉を交わすと、ベルナールはユイカに笑顔を向けて挨拶をした。

「御機嫌よう、巫女。白羽の宮は気に入っていただけましたか？」

「はい！ とっても好きです、此処。お部屋も家具も綺麗だし、可愛いし」

ユイカは少し興奮気味に言った。

ベルナールもそれを見て、「それはよかった」と花のように微笑んだ。

ユイカの身支度を手伝いながらカリリー又に聞いたところによると、王子の来訪は昨日の時点で決まっていたらしい。

ユイカがベルナールと対面した折、その別れ際にベルナールから提案したのだという。

ユイカはその時、聞きたいことがたくさんある、まだ全てを尋ねきれてないからと引き止めたのだが、その時彼には差し迫った公務があったのだ。

だから王子はその時、今日の昼食と夕食を共にする事を約束し、ユイカをこの白羽の宮へ案内させたのだそうだ。二度も食事を共にすれば、ある程度のことは話せるだろうと。

そう言う訳で、部屋付きの侍女　やはり、白羽宮にも三人ほど勤めているようだった　が食事を用意した、白羽宮の食堂へとベルナルを案内すると、フィリスのする事はもう残っていなかった。とは言っても、別室で手早く肉の挟まれたパンとスープだけの軽食を済ませれば、カリィヌや部屋付きの侍女たちと共に入れ替わり立ち代り、給仕の手伝いをしなければならない。

フィリスに給仕仕事の経験は無いので、専ら裏方で雑用を任せられていたのだが、それでも忙しい事に変わりは無かった。

給仕係りの侍女の手伝いで、一度食堂内に足を踏み入れた時、ベルナルとユイカはにこやかに話していた。王子の後ろの壁には護衛である濃い茶髪の騎士が控えていた。

話の流れから察するに、どうやらユイカの『聞きたかったこと』つまり疑問は、大半が消化されているようだった。《封じの巫女》とは何か、と言うのもそれに含まれているようだったから、恐らく茶会の折に王子に聞きたかったことの大半を、午前中と先程の茶会でカリィヌやフィリスに質問したのだろう。

「だから私、《封じの巫女》として頑張ろうと思うんです。そのために、まずは文字の勉強をしようかなって」

部屋から退出する際に聞こえた、そんなユイカの言葉が、フィリスのその推測を後押しした。

食事を終えると、皇太子はユイカにクロードと呼ばれていた護衛の騎士を連れて、早々に白羽宮から去っていった。

多忙であるのか、ユイカに付き従って見送った時、ベルナルは少し早足で廊下を歩いていった。



さて、来客は帰ったものの、フィリスの心休まる時間は全くといって良いほど無かった。職務中なのだから仕方ないかもしれないが、しかしまるで半年分の心労が一気に襲ってきているかのような感覚なのだ。

そもそも、ユイカから彼女の故郷についてとその決意を聞いてからこちら、フィリスは何かと不安定だった。一見しただけでは分かってなかったが、少なくとも内面はそうだったのだ。

移動の初日で緊張していると言うのもあったが、何よりユイカの立場と言である。一度に多くの変化が訪れていたし、今日知ったのは特異な情報ばかりだった。

「あのね、ベル様が明日にでも、知り合いに文字の教師を頼んでくださるって」

ベル様、とはベルナールの愛称であるらしい。

王子殿下との食事を終えて、相変わらずご機嫌なユイカは、就寝前に唐突に言った。

豪華な浴室での沐浴や、眠りに入る前の支度を終えて寝室に赴いた際の、本当に就寝の間際の事である。

「勉強、あんまり好きじゃないけど頑張ろうと思うの。だって私、《封じの巫女》なんだから、この国の言葉も読み書きできないといけないでしょう？」

ユイカが笑うと、カリィヌが「頼もしいですわ」と口元をほころばせた。彼女はユイカ付きになる以前は、ベルナールの侍女の真似事をしていたと言う。貴人の世話をする手際は洗練されており、フィリスは専ら彼女の補佐くらいしか出来なかった。フィリスは突然の新しい仕事に、今日だけで多く失敗もしたし、カリィヌに助けられて何とか一日の職務を勤め上げられたかどうかといった具合だった。

「ユイカ様の努力、ベルナール様も喜んでくださいますわ」

「そう？ よかったあ」

そう言いながら、ユイカはベッドに体を横たわらせた。

カリーヌが「お休みなさいませ」と言って明かりを消すのにあわせて、フィリスも同じように挨拶をする。

「おやすみなさい」

ユイカからそう返答されると同時に、そして侍女二人は一礼の後に寝室から辞した。

すぐに寝室の隣の控えの間に赴いて、夜警を担当する女官にユイカの就寝を報告する。まさか一日中侍女として勤めるわけにはいかない。昼夜で仕事を引き継ぐのだ。

「ランベールさん」

報告を終わらせて退出しようとする、フィリスは夜間に白羽宮に控える手はずの女官に呼び止められた。

「マリエール様から伝言よ」

「女官長様から、ですか？」

王城の南の衣裳部屋にフィリスを迎えに来た、あの黒髪の女官だった。銀鎖と珊瑚の装飾持ち。

「ええ。貴人付きの侍女に移動になったのだから、当然あなたにも個室が与えられるの。この白羽宮の一角よ。シュザン様が移っている部屋の向かいだから、彼女に案内してもらおうといいわ。もう移れるはずだから、二、三日中に荷物を持ってきてしまった方がいいわよ」

「個室、ですか」

そして、彼女から部屋の鍵を手渡される。

フィリスは軽く目を瞠った。そうだ。忘れてはいたが、自分もユイカと言う貴人に付く侍女となったのだから、主人の居室の近くに個室が与えられるのだ。それが王宮での通例である。

シュザン様　王子の乳兄妹であり、貴族でもあるカリーヌに、女官は敬称をつけて呼んだ。

カリーヌもまたユイカ付きの侍女として、第一王宮のカリーヌに与えられた移動してきたのだろう。

思わず視線を向けると、カリーヌは「案内しますよ」と、金の髪

を揺らして微笑んだ。

フィリスは黒髪の女官とカリーヌに礼を言うと、カリーヌと連れ立って控えの間から出た。そして彼女について、白羽宮の北東寄りの一角へと向かう。

「ええっと、幾つか伺いたいのですけど」

「何かしら？」

歩きながら、フィリスは尋ねた。

「個室持ちの侍女にとっての、何かしらの決まりとかはありますか？」

例えば四人部屋でも、幾つかの暗黙の了解があったように。

そう言うと、カリーヌは「そうね」と少し考え込むように口元に手を当てた。

「食事は他の方と同じように食堂でとるわ。でも、たいてい夜食が朝食だけだけれど。主人の食事の世話もしなくてはならないから、昼食と夕方の軽食の殆どは控えの間で頂くの。決まりは特に無いけれど、王宮内での通例を守らなくてはならないには変わりないわ」  
そして、思い出したように彼女は続ける。

「ああ、それと自室には警備上問題が無ければ、友人や恋人を招いてもいいの。王城内での外出も、衛士に報告をした上であれば仕事に支障が出ない限りは自由だし。そう言う点はあるがたいわよ」

ふふ、と微笑して、カリーヌは何か含むように言った。

「そうですね……また何か、分からない事があつたら伺っても？」

「ええ、勿論。ああ。此処よ。こちらがフィリスさんのお部屋」  
いつの間にか、目的の場所にたどり着いていたようだった。一定の間隔で通路には扉が並んでおり、白羽宮に仕える侍女が個室を賜れば、その扉の奥の部屋は一つ一つ埋まっていくのだろうと察せられた。

礼と共にカリーヌに挨拶をすると、彼女もまたフィリスに挨拶を返して、向かいの扉の奥に消えていった。

フィリスも示された部屋の扉を開けて、賜ったばかりの個室に足

を踏み入れる。

軽く仕切られて二間になっているその部屋には、手前に小さな机と椅子が、広めに場所を取られた奥の間には、ベッドとクローゼット、化粧台が置かれていた。濃い灰色の侍女服の替えを始めとした支給品は手前の部屋の机に置かれており、家具や壁紙は一見簡素ではあったが、上品な物だった。

フィリスの私物は一切見当たらない。流石にそこまで気配りがしてあるわけではなく、元居た四人部屋に、自分で取りに行かなければならないようだった。

「……疲れた」

部屋の確認を終えると、ため息交じりの独り言を呟いて、フィリスはくるりと後ろを向いた。ドアノブに手をかけ、部屋の外へ出る貰ったばかりの鍵を使って部屋の扉を施錠すると、そのまま早足で白羽の宮から出るべく廊下を歩いた。

外出が自由と言うのは、好都合だった。

まだ夜の遅い時間でもなかったから、同僚や上司への挨拶や荷物の移動などの用事を、今日の内に幾つか済ませることが出来そうだった。

それに家族に、アデルに、一刻でも早く話して相談したい事があった。

フィリスはひとまず上司であった侍女頭に現状を報告してから、アデルの元へ行く事を決めた。

一人で何かを抱え込むのは、あまり得意ではない。今までだって何かあっても、物心ついた時からまるで仲の良い双子の如く一緒に居た家族と、いつも二人で背負ってきたのだ。

母クロエがフランスを身籠ったと知った時も、産後間もない母と生まれたばかりの弟と共に、まだ十なかったばかりの時分に知り合いも居ない王都へ越してきた時も、そしてクロエが死んだ時だってそうだった。

ぼつきり折れてしまう前に、アデルに会おう。会って話して、ま

た二人で前へどうにかして進むのだ。

フィリスはやがてたどり着いた白羽宮の衛士の詰め所で、詰めていた衛士の一人に外出する旨を伝えると、足早に離宮を後にした。

## 07 - - 召喚少女と王子の晩餐（後書き）

地味に、ですが男性キャラも出せるように……早く展開を進めろ、私。

## 08 - - - 魔王の兄妹が談ずるは

宵も深まり始めた頃、王城の中枢からは離れた北の一画。

官舎として割り当てられている幾つかの建物の内の一つに、フィリスは訪れていた。

南の衣裳部屋の侍女頭、つまりは先日まで上司であつた侍女への移動の報告を終え、必要書類後日提出する事を約束してから、彼女は家族に会いにきたのだ。

普段、ベッドの脇に置かれた小さな机と揃いの木製の椅子は、部屋の主である萌黄色の瞳の青年　アデルだけが利用している。

けれど今、其処そこに座り込んでいるのは、アデルではなくフィリスだつた。

「それで、いきなり所属移動とか……。普通、実際の移動までには最低でも二週間は研修期間があるはずでしょ？」

「何でそんな無茶が通つたのさ。皇太子の客つて、召喚された人間じゃなかつたの？」

靴を脱いで、椅子の上で膝を抱えて座るフィリスが、声に疲れを滲ませながら呟く。

アデルはそれに相槌を打ちながら、部屋の四方の壁の其々それぞれに、指で小さな陣形を描き終えた。

「や、話を聞くに、召喚されているのは間違いないみたい」

「じゃあ何で。召喚されたって事は、召喚主がどれだけ高位の人間でも、彼女自身は所詮しよせん部外者なんじゃないの？」

言いながら、彼は部屋の中心で弧を描くように、空間に線を引くように左腕を薙いだ。瞬間、室内を軽く風が巡りだしたのは、薙ぐと同時に先程描いた部屋の四方の陣形へ向け、少なからず魔力を流

したから。

風が椅子の上でうずくまっている、フィリスの髪を僅かに浮き上がらせる。

アデルは次いで、右手で掴んでいた、筒状に丸められている布を片手で広げた。薄い青に染め上げられた其れには、白い色で幾つかの図形とまじないの綴りが幾何学的に描かれている。ふわりと空気を孕んで風に舞い上がった布地は薄く、少し幅のある帯のような、細長い形状だった。

「ルーデインの信託により、此処に円環は発生する。生じた流れは円環より境界へ瑩域<sup>えいき</sup>へ揺籃<sup>ようらん</sup>へと至り、紡ぎ糸は地平線を織り成すだろう」

アデルが先程から発動準備をしていた、儀式魔法を仕上げた。

発動の呪文を音にして発すれば、ぱしんと言う幽<sup>かす</sup>かな澄んだ音が、二人の耳朵<sup>じだ</sup>を打った。同時に室内を巡っていた風は収まる。

「結界、ありがとう」

儀式魔法によって、結界を発動するよう彼に頼んだのはフィリスだった。これから提示しようと思っている話題は、できるだけ人に聞かれたくなかったのだ。

アデルとフィリスは二人とも、本職の魔術師ように魔法を自在に行使できるわけではないが、この手の術式だったらそれなりに扱える。勿論得手不得手はあり、こう言った系統はフィリスよりアデルの方が得意としている。だから彼女は防諜の為の結界を、彼の手に任せた。これで安心して話せる。

円を描くように中空に舞い上がっていた布は床に落ち、アデルはそれを右手で握ったままだった端の方から手繰り寄せて、元のように巻物状に丸めた。相変わらず布地には白い幾何学模様が描かれたままだったが、それらは今は僅かに淡い光を発している。

「どういたしました。それにしても結界まで張るって事は やっぱり、話題はクロエ<sup>かあさん</sup>に関係してる？」

フィリスと向かい合うようにしてベッドの端に座ったアデルは、



先程書庫で会った時の事を思い出しながら、「今日連れてきた彼女の出身は、『ニホン』って言ってたよね？」と続けた。

「うん。でも、先に話したいのはフランについて」

けれどフィリスはそれを憂鬱そうに流し、「あのね」と言葉を繋げる。

「イサワユイカ　彼女、当代の《封じの巫女》として召喚されたんですって」

「は？」

「だから、彼女の待遇は王女級。私みたいな下っ端の侍女を、『貴人付き』に即日異動なんて言う無茶が通ったのも多分その所為」

フィリスは最初のアデルの疑問に、答えに似た言葉を返す。

結界を張ってもらったのは、勿論後ほど母クロエに纏わる話をしたかったのもあるが、《封じの巫女》について告げる為と言うこともあった。

たとえ相手が身内であっても、口止めされていた「ユイカは《封じの巫女》」と言う事実を話すのは命令に背く事であるからだ。

勿論王宮の侍女として、このように命令に背くなどと言う事はあってはならない。そう分かつてはいるし、フィリスとて普通ならば絶対に情報を洩らしたりはしない。

「《封じの巫女》って、アレ？　『<sup>けいさ</sup>繫鎖の森の《ルーデイン》』の、西の竜の封じ手？」

「そう、それ。その当代。巫女が何なのかとか、そう言う事はまだ分かっていないみたいだけど。でも彼女、状況からして確実に、魔性殺しの《封じの巫女》よ」

けれども、だ。フィリスはアデルにその事を言った。彼女は、侍女である事よりも姉である事を優先した。

「彼女とあの子が遭遇、なんて無いと思うけれど。でも、《封じの巫女》って、一目で魔族を識別するって、母さんも言ってた」

「フランの話って、そう言う事か」

少しだけ、アデルは言葉を詰まらせた。

フラン。フランシス。ランベール家の末子は、クロエ・ランベールを母として生まれた。

そして父親は、人間ではない。

「半分とは言え、魔族だとわかったら、って言うわけ？」

「そうよ。少なくとも、彼女は『魔性を封じる事』に肯定的だったわ」

堅い声音でのアデルの問いかけに、フィリスは不安を押し殺すように瞑目する。

真に堅固な結界で封じられる事は、魔族にとっては死を意味する事と聞いている。

魔族。人間に等しい知性、そして人間を凌駕する寿命と魔力を有する魔性の族と呼ばれる彼らは、人にとっては憎悪と恐怖の対象としか認識されていない。

害悪でしかない魔物と呼ばれる凶暴な生き物を、統括しているのが魔族、そしてその王たる魔王であると言うのが、彼らにとっての常識だからだ。

しばらくの間、沈黙が二人の間に降りていた。

魔族と人間の混血児であるフランシスは、純粋な魔性でないとは言え、それでも魔力は魔族のそれに近いのだと、母から聞いている。普段彼は王宮には近づかないが、同じ王都には居るのだ。もしかしたら何かが切欠で遭遇し、封じられ……と言う事も、可能性としては無いわけではない。

普通に暮らしている限りでは、魔性であつても人間であつても、その魔力が如何様なものか、どれほどのものを感知する事はできない。誰よりも魔力を優れて行使できる魔王であつても、だ。

よほど強固な繋がりや、かなりの魔力を放出しない限りは、魔力の質と言うものはそうそう他人に感知されたりはしない。だからフランシスだって、《封じの巫女》ユイカに近づいたりせず普通に暮らしていれば、魔族と識別されないはずである。

けれど、《封じの巫女》の『魔族を識別する能力』が、正確には

どれほどのものは分からないのだ。不穏である事には変わりなかった。

「だから、フランの話が先なのよ。母さんは死んでいて、フランは生きているもの。私、あの子が殺されるなんて、絶対に嫌」

「当然だろ。俺だって嫌だよ」

すつと瞼を上げて、フィリスは正面に座る青年に言った。アデルも即答する。

「けど、実際問題何が出来る。王都を離れる気は無いんだろう？」

「まあ。フラン、楽しそうに学校に行ってるじゃない」

頼れそうな者も一応は一人、クロエの名付け親が居るには居る、けれど彼は遠く離れた僻地で暮らしているのだ。

人間としての生活と良質な教育をフランスに与えたい。そう亡き母クロエが願っていた事もあるし、フランスにとって学院での生活は、心底楽しいものであると常々聞かされている。王都を離れる事は、矛盾はするものの出来るだけ最後の手段に残しておきたい。「王都でフランの味方になれるのなんて、俺達くらいしか居ないじゃないか」

「アルシードは、いつも何もしないものね。でも、出来ればあの子には、最後まで学校、通わせてあげたいわ」

けれど、『弟が殺されるのは嫌だ』『フランスをユイカに封じさせなんてしない』と言う決意はあっても、そこから先の手段が問題だった。

「整理しよう」

アデルが顔を上げた。

「まず、フランが混血とは言え魔族であることに変わりない。魔王の第一子である事も同じ」

「それと、母さんの血縁の息子である事も、よ。最悪、アルシードに頼れなくても、逃げ込める場所はある」

フィリスが付け加える。

アルシード。その苦い思い出ばかりの名前は、クロエの夫の物だ

った。そしてフランススの父親の物。同時に当代の魔族の王の物。

フランススの父親は、アルシーダは魔王だ。彼はフランススを含めた、ランベール家の兄弟とはあまり関わりを持とうとしないが、それでも魔王はフランススの父親だった。

アデルやフィリスにとつても、彼は養母の夫と言うことでいわば義父にあたるのだが、二人は彼を「アルシーダ」と呼び捨てか、その位階の呼称でしか呼ばない。彼を父と呼ばわるのは、たった一人フランススだけだ。それも滅多にある事ではないが。

二人は義父が好ましく思っているわけではないが、嫌っていると  
言うわけでもない。子供達が物心つく前から、彼はよく養母クロエを訪ねて来ていた。それに何より十数年前、彼とは全く縁もゆかりも無い赤子　フィリスを、北方の何処いすこかより拾ってきて、クロエに育てるよう託していったのもアルシーダだ。

けれどそれほどに縁深いにもかかわらず、けれど義父と養い子たちの間の溝は深い。そして、正真正銘の血縁である分、父と息子の間にはもつと深い溝がある。

「ああ、考えようによつてはそれもあるのか」

すっかり忘れていたと言うように、青年は呟く。

「そつちはあくまで保険だけれど」

フィリスはアデルが納得したのを見届けると、軽く頷いた。

「それで、『巫女』とフランが遭遇する確立は低そうだけど、正確にはわからない。ここまではいいよね？」

「ええ」

「じゃあ、結論。それを踏まえた上での『巫女』相手の対策とかは？　何か浮かぶ？」

そう、それが問題なのだ。

フランススの父親は魔王で、言わずもがなフランススは次代の魔王になりえる、たったひとりの後継者だ。血統的に。

けれど魔族たちに、『封じの巫女』が召喚されたので、フランススが封じられないよう守ってくれ』と、こちらから頼む事はでき

なかった。

魔族とは基本的に奔放であるし、その統括者である魔王はこちらに関わってこようとしなない。それに何より、成人するまでは、『人間として暮らしたい』と、フランスス自身も願っている。

魔族は魔族で、こちらに関わっては来ないものの、後継者が自分達の社会に在って欲しいとは思っているらしい。一度魔族に頼れば、そのままフランススが魔族方に囲い込まれる事は、想像に難くない。けれどいざ人の社会でフランススが混血の魔族であると知られてしまえば、過去にちらほらと存在した他の混血児達のように、迫害されてしまうだろう。そもそも、『封じの巫女』が召喚されている以上は、そんな事になったら封印されてしまう。それはフランススの死と同意義だ。

「単純に言えば、王都から離れるのが良策。『巫女』から出来るだけ離れるために。今はそれ以外に、私達にできそうな事は浮かばないわ」

「でも叶うなら、王都からは離れたくは無いから……。それに、巫女召喚の直後に、一家揃って突然仕事も学校も辞めて引越しか、ちよつとまずいかもしれないし」

アデルは考えながら言った。

自分はともかく、フィリスは当の『封じの巫女』付きに移動になったばかりなのだ。

流石に魔族が身内に、なんて言う事実を勘ぐられる事は無いだろう。が、あまりにも突然では、何か穿<sup>うが</sup>つた見方をされて、別件の疑いをかけられるかもしれない。今まで辞職やら退学やらの気配など全く見せていなかったし、そんなつもりも無かっただけに。

「じゃあ、やつぱり私達にできる事って言ったら、地味で地道なあんまり効果なさそうな事くらいじゃない。『巫女』がフランスと接触しないようにするとか。フランスの事を出来るだけ誰かに話さないようにするとか」

フィリスの言に、アデルが苦虫を噛み潰したように表情を歪めた。

「うわあ。何か、俺達の無力さが浮き彫りだね」

「仕方ないでしょう。実際できる事なんて少ないんだから」

庇護者としては情けないが、しかし事実である。フィリスは切つて捨てた。

弟が魔王の王子であつたり、母が魔王の正妃であつたりしても、所詮アデルとフィリスは特異な環境で育つただけの、ただの人間だ。儀式魔法やまじない等の妙な技能が多少扱えると言っても、それに関してだって特別才能があるわけではない。強いて言えば儀式魔法やまじないの使い手は至極少ないから、そこはある種の『特別』と言えるかも知れないとか、その程度だ。

しかも使い手が少ないのは、儀式系統魔法などがあまり便利ではないから、の一言に尽きる。

どちらも事前の準備やら形式がかった呪文が必要なのだ。効果も山をえぐるとか魔物を屠るとか言う大層なモノではないし、何より今の世の中では、そんな魔法はそれほど役に立たないし重要視もされていない。

先程からアデルが張っている結界にしても、他の系統の魔法にはもつとたやすく扱える術が多い。

儀式魔法やまじないの利点といえば、応用が利いたり効果が地味に強固だったり長続きすると言うくらいしかなかった。

フランスを《封じの巫女》ユイカから守るために扱えそうな術も無いわけではないが、所詮はその程度である。たいした助力にはならなさそうだった。

「学院卒業してから、戦闘とかは縁が無いから……方針としてはとにかく隠して、危なくなったら逃げる事くらいしかできないか」  
「王宮の奥で暮らす《巫女》様と、王立学院に居るフランが遭遇なんて、滅多に有る事じゃないだろうけれど。でも樂觀視は出来ないものね」

「本当だよ。じゃあ、基本的にはその方向で」

次々言葉を連ねていけば、それなりの手段にたどり着いていた。

それにしても、フランスが心配である。

封印されてしまうかもしれないと言う事もそうだったが、何より何時殺されるか分からないと言う心労を、小さな弟にかけてしまうことが口惜しかった。しかし、安全のために伝えないわけにはいかない。

母親は既に亡く、父親からは放っておかれている、幼い次代の魔王様。

実の両親に代わってその保護者を務める自分達兄妹は、どれほどに弟を守れると言うのだろうか。

他人から見れば、何とおかしな構図。

世に平和をもたらすとされる《封じの巫女》から次代の魔王陛下を守るべく、彼女に組するであろう人の王国に、同じ無力な人の子である司書官と侍女が刃向かうなど。それも、最終手段と目されているのは逃げの一手、ただそれだけとは。

## 08 . . . 魔王の兄弟が談ずるは（後書き）

もしかしたら、次話の展開の関係で一度手直ししたりするかもしれませんが……一応更新です。誤字脱字、文章でおかしいところがあればご指摘くださるとありがたいです。



「じゃあ、フランの事はいったん区切ろう」

妙な図式の現実を認識しようとするかのように、一度だけ深く呼吸してから、アデルは改めて声をかけた。

「他にも聞きたい事、有るし。例の《巫女》が元々居た場所って言う『ニホン』とか、さっき言ってた母さんの事とか。折角結界張ったんだ、一気に済ませたいけど……時間、大丈夫？」

「ああ、うん、それは大丈夫。さすがに日付変わる前には帰って寝たいけど」

フィリスは頷く。正直、働き疲れていた。

それはアデルも同じようで、「同感」と困ったように微笑する。

「結論から言うとな、《巫女》の故郷と母さんについての相談、同じ話なの」

「同じって。……え、と。まさかとは思うけどそう言う事？」

フィリスがその話題を持ち出すと、アデルはしばらく言葉に窮した後、曖昧に聞いてきた。フィリスはそれを肯定する。

「そう言う事よ。《巫女》のやってきた場所は『ニホン』で、そこには『ケイサツ』って言う警備の役人が居て、彼女は『コウコウセイ』って言う学生で、小説を読める『パソコン』って言う物が有るんですって」

「『エイゴ』がどうかとも言ってたね、そう言えば」

「彼女からしてみればどれも常識的なものらしいけれど、すべてルーデインや近隣諸国には、存在しないモノだわ。加えて、彼女曰く『自分は異世界から来た』そうよ」

膝の上に顎を乗せ、少しばかり身を乗り出してフィリスが言葉を

繋げる。

アデルはその話の内容に、軽くこめかみを押さえた。彼女の示唆で、最初にまさかとは思いなながらも想定してしまった可能性が、嫌でも可能性から事実に近いしていく。

「私の言いたい事きちゃんと伝わってるわよね？ イサワユイカ曰く、彼女の召喚元はエゼン大陸じゃなく……って事よ？」

「伝わってる。けど、何だよその嫌すぎる事実。誰の嫌がらせだよ。フランが泣くじゃないか」

「泣くって言うか、世間の理不尽さを知るいい経験になるって言うか。頭が痛いわ」

フィリスも少しばかり表情を歪めて相槌を打った。

お互い、それが事実とは分かっているけど、そうとはあまり認められなかったのだ。少しの間、言葉を濁した会話が続いた。

しかしとうとう観念したように、アデルが嘆息する。

「何それ。つまりフランってば、異世界から来たとかいうその《封じの巫女》に、命狙われるかもしれないわけ？」

「そうよ。ついでに、私達はその異世界から来たとかふざけた事言うユイカサマ相手に、嫌でも全力で抵抗しなくちゃいけないとか言うね」

認めたくない事実の欠片を言葉にすれば、半ば自暴自棄になったような口調でフィリスが補足してきた。

彼女は言葉の通りに実際に泣きこそしてはいなかったが、少しばかりその微笑には影が差している。含みのある『様』の敬称をつけた呼称には、少しばかり棘があった。

そのいたたまれない気持ちがよくわかるアデルもまた、彼女に同調するように顔をしかめる。

ただでさえ弟の危機だというのに、その害し手になるだろう少女が、異世界からやってきたなどと。あまりにも突飛過ぎた。

なまじこちらが真剣に弟を守りたいと思う分、異世界から来たなどと言う彼女の存在は、ふざけているとしか思えなかった。

「それにその上で私、彼女に仕えなくちゃいけないのよ? 《巫女》云々を抜きにしたって、私、人間的にも彼女に好感とか持てないし。今日一日だけでもかなりやりづらかった」

そんな言葉を吐くフィリスは、少し苛立っているようだった。

「またどうしてそこまで」

アデルが少しばかり気圧けおされると、「根底にある価値観が違いくるもの」と、彼女は続ける。

「召喚されたからには、彼女は簡単には故郷に帰れるわけじゃないでしょう? でも、帰れないわけでもないわ。一応だけれど召還術だつてあるもの。彼女が望めば、元居た場所に帰る事ができる。そりゃ、《巫女》だから難しいかもしれないけれど」

一息に言い切つて、フィリスは「なのによ?」と藍色の瞳を瞬かせた。

「帰れるのに。彼女は、母さんと違って生まれた場所に帰る事ができるのに、そんな事望んでいないの。それどころか、『故郷に帰る』事は、彼女にとっては『そんな事より』で流せる程度みたいだし」

「そんな事、言つたのか。あの《巫女》」

「ええ」

くしゃりと。苛立ちの色が見えていたフィリスの表情が、少しだけ崩れる。

アデルも無意識だろうか、悔しそうにきゅっと口元を引き結んだ。「『家族や友達ともうまくいつてなかったし、この世界にこれてよかった』って。別に、彼女の価値観が悪いつて言つてるわけじゃないのよ」

「彼女は、家族に重きを置いていないって事?」

「そうみたい。でも、それが許せないってわけじゃないの。そんなの、人それぞれでしょ? 私がとやかく言える事じゃない」

気を張り詰めていたからだろうか、感情の起伏が激しい。

フィリスは抱えていた足を、ぶらんと床へ向けておろした。けれどっ少しだけ距離が足りず、つま先は床すれすれの位置で浮いている。

「ただ、自分の生まれた場所に、母さんはあんなに帰りたがっていたから。死ぬまですっと。どうしても、重なつて見えちゃうの。重なる分どうしても、納得がいかないって思ってしまう。ただの嫉妬と八つ当たりよ」

「それはなまじ《巫女》の境遇が、母さんと似ているから？」

「それも、大きいと思う。母さん、苦しいって泣いていたから。だから余計に、『帰ったりなんてしない』なんて笑って言う《巫女》が、ずるいなんて思ってしまう」

するりと零れ出てくる言葉を、留めも纏めもせずに音にしていけば、それは少しばかり支離滅裂な、長々とした物となっていた。

とどのつまりはそう言う事なのだ。

口惜しいのである。母がどんなに願っても、とうとう手に入れられなかった帰郷の権利を、彼女がやすやすと手放した事が。

それこそ、価値観は人それぞれなのだから、とやかく言えたことではない。それに彼女は母とは関わりがあるわけでもないし、その存在すら知らないだろう。

けれど、感情を割り切る事ができないのだ。

自分の事ではないけれど、手に入れられるはずだった様々なモノを諦めてまで、自分達を育ててくれた母の、最も望んでいた事だ。

これほどまでに家族に重きを置くのは、半ば行きすぎかとも自覚はしている。ランベール家の子供たちは、育った環境からか、皆何かと身内へ依存しがちである事も。

クロエは別に、ユイカのように、どこぞから召喚されたわけではない。

けれど、理由は違えど帰郷が困難と言う共通点もあって、ルーデインではあまり見かけない黒い色をした瞳を持つ彼女達は、フィリスにはどこか似通っているように思えてならなかったのだ。

「母さんは帰りたくても帰れなくて、彼女は帰れるのに帰らなくてそれが、どうしても悔しくて」

高ぶっていた気持ちたちが落ち着いてきたのか、フィリスはゆっくり

と一呼吸置いた。ずっと不安定だったのは、この事も大きかった。  
「関係ないって、わかってる。悔しいだけなの。それだけ」

彼女が半ば自分にも言い聞かせるように繰り返すと、区切りをつけるように「そうだ」と、唐突に話題を変えた。

先程から、彼女が呟くのは母の思い出とユイカの言の対比ばかりだった。

疲れていたり、弱っている時、何かをつらつらと言葉にして零すのは、昔からの彼女の癖だ。

その相手は、大抵がアデルである。

逆にアデルが不安定な時に、それに気付いて気晴らしに付き合うのはフィリスだった。

戸籍上は兄妹であるものの、二人の関係は幼馴染か親しい友人に近いものが有る。何時だつて二人は対等であつたからか、そう言つた奇妙な間柄が成立していた。

「フランにも、この事は知らせなくちゃね」

しばしの沈黙を置いて、話題を転換するようにフィリスは言つた。  
「そうだね。今度、一日二日休暇を取つて、直接会いに行つて話してみるよ。手紙で伝えるのは不安だし。フィリスは多分、しばらく休暇とか難しいだろ？」

アデルは急に彼女が話題を変えた事に、一瞬目を瞠つた。

少々戸惑つたようだったが、けれどすぐに合わせてくる。

抱えた不安を吐き出す、不安定な時の彼女の呟きは、始まるのも終わるのも唐突ですつぱりとした物だ。アデルの知る限りでもいつもそうなのだ、慣れているし、知っている。

彼と彼女は昔から、お互い相手に不安を零して、もしくは言葉を交わして、時には一緒に行動して、悩みを軽くしてきた。まるで不安と安心を、同時に共有するように。

まだ少し不安定さは残るものの、フィリスは気持ちを切り替えて言う。

「うん、お願い。流石に移動させられたばかりだし、多分無理だと

思うの」

移動直後に、そうそう休暇など取れるとは思えなかった。覚えなければいけない仕事は山のようにあるだろう。

結局その後、二人は結界を解いて話を終え、それぞれの居室で眠りに付いた。

夜も遅かったし、何より疲労が溜まり切っていたからだ。フィリスは慣れぬ職場で、アデルは心配を抱えながら、一日中働いた結果だった。

その夜の話の内容以外は、二人にとっては良くある対話だった。

何か相談したり、家族の話をしたり、近況を報告したり。

不安を零して心が軽くなった所為か、フィリスは翌日、随分と気持ちに余裕が持てた。

「あのね、私さっきまで、元の日常の夢を見てたんだ」

翌朝になればすぐに、貴人付きの侍女の仕事が始まる。

そしてベッドから起き上がりながら、ユイカが言ったのがこの言葉。

「普通に楽しかったけど、やっぱり私は、あんなつまらない場所より、こつちの世界の方が好きだなあって思ったの。こつちには、私を必要としてくれる人たちが居るもの」

そんな一言を聞いても、不自然でない笑みを浮かべて受け流せた。「頼もしいですね」

顔を洗う水差しを差し出しながら、カリィヌがいつものように笑って相槌を打った。

そしてまた、侍女の仕事が始まる。

09 - - 異人は帰郷を夢に見た（後書き）

かなり不完全燃焼……後日修正か改稿するかもしれません。

## 10 - - - 少女の知りえぬ裏事情

「真面目にやってんのかよ、ユイカ様」

「当たり前でしょ！ 私だって、早く文字覚えたいもん！」

「じゃあ何でこんなに間違うんだ！？ 正答率三割って、流石にかしいだろ！」

今日も白羽宮では、そんな会話が繰り返されていた。

机に向かって、紙の上にペンを滑らせるのがユイカ。そして、それを監督しながら彼女に文字を教授するのはエドワールだ。

互いに喧嘩腰ではあったが、学習は真面目に進められていた。

第一王子ベルナルが、ユイカに約束どおり文字の教師を紹介してきたのは、一週間ほど前の事である。

そして紹介されたのが、何の因果か書庫でユイカと口論を繰り返した、エドワール・リシユリユーであったのだ。

ベルナルは口論の事を知らない。よって、エドワールとユイカの仲が悪いと言うことも知らなかった。

ただ、「誰か条件に合う教師を知らないか」と、ベルナルが頼ったエルディー術師が紹介したのが、弟子のエドワールだったのだ。エルディー術師はベルナルが以前に教えを受けていた家庭教師で、エドワールの魔法の師はエルディー術師。つまりはそう言う事だった。

特別他意の無い全くの偶然だったのだが、それにしても生徒と教師の関係は、あまり良いとはいえなかった。

何しろ、事あるごとにいがみあい、互いに喧嘩腰で会話をしている。

これでは学べるものも学べず、ユイカの勉強もはかどらないだろう。当初は確かにそう思われていた。



けれど妙な対抗意識でも芽生えたのか、彼女の文字の学習はそれなりに順調だ。いさかいながらも、エドワールはきちんと教えているし、ユイカも真面目に取り組んでいる。

フィリスもこの一週間、そんなユイカの世話に奔走していた。

主にエドワールが文字を教えに来るのは、日中の一時間ほどである。

彼にも宮廷魔術師としての仕事があるのだ、そうそうユイカにはかり構ってもらえない。それにユイカもユイカで、エドワールやベルナルが授業や食事の為に訪れている時以外は、この世界の常識やら礼儀作法やらを教え込まれていた。

こちらを日常にまぎれさせて、さりげなく教授するのは、主にカリーヌだ。時折フィリスや部屋付きの侍女たちも手伝ってはいたが、貴族の子女であり王子の乳姉妹として高い教育を受けているカリーヌは、侍女である事も含めて教師としては最適だった。

ユイカとて王女と同格である《封じの巫女》であるのだから、正式に教授を要請された以上は、エドワールもユイカの専属として所属を移動してきても良いはずである。宮廷魔術師の職務には要人の護衛や貴人への魔法の指導等も含まれているのだから。

しかし、どうやらユイカはまだ公式の存在ではないようなのだ。そもそも彼女の召喚もベルナルの独断に近いものがあつたらしく、術が行使される前はその成功も危ぶまれていたと言う。

けれど実際に召喚されてしまった《封じの巫女》を、さてどう扱おうかと、現在王国の上層部で審議されているらしい。

そう言う訳で、未だ国家から正式に要人と認められているわけではないから、宮廷魔術師をユイカの専属の教師として付ける事は叶わなかった。当然ながら、現時点では彼女の生活費をまかなう公的な予算も計上されていない。

白羽宮の使用に関してのみ言えば、《封じの巫女》は『王国の客人』、としては認められた為に許されている。しかし、備品の費用や侍女及び衛士の給金などは全て、現時点ではベルナルの王族

予算から出ているようである。

つまりはユイカの書類上の待遇は、言うなれば第一王子の愛妾に等しいのである。妃や妃候補のように公的予算が付くわけではないが、ベルナルの後見と保護の下で離宮を与えられているのだから、ユイカはその事を知らなかったし、また知るうとしてもしていなかったが、それが彼女の現状であつた。

だからこそ彼女の希望やわがままにより発生する負担の殆どを、前述のようにフィリス、そしてカリリーヌが背負わざるをえなくなつていた。

例えばユイカの文字の勉強もそうだ。彼女とて教師から直接教わるだけではなく、世の学生のように復習などにも取り組んでいる。そしてユイカの要望でそれに付き合うのは、侍女二人の日課となつてきていた。

貴人付きの侍女がそのように主の勉強に付き合うと言つのは、まあそれなりに有る事ではある。

しかし、ユイカが主に復習に取り掛かる時間が問題だった。彼女はいつも夕食や沐浴を終えてから、つまり寝りにつく準備を終えてから、夜半まで机に向かつている。

そしてフィリスもカリリーヌも、夕食どころか軽食も取れないままにそれに付き合うのだ。

夜と言つのは、案外侍女にとっては忙しい時間である。

主の夕食の準備の確認から始まって、給仕、沐浴の手伝い、寢室の用意、就寝支度の補助と、大きなものだけでもこれだけが怒涛のように続いてゆく。

何しろ二人だけで仕事を回転させているから、その間は昼食時のように何とか交代で休みを取って、手早く食事をする事もできない。だからこそ主人がそれに気遣い、侍女や侍従たちが休めるように早い内に就寝してしまう。それが、身分の高下を問わない、主従間の暗黙の了解であつた。

就寝の前に片付けなければいけない仕事があるなど、眠るのが遅

くなりそんな時は彼らに休憩をするよう声をかけるのも、だ。

自分からそう言った事を言い出さないのも仕える者の一種の礼節なのだから、その分気遣いを見せるのが主人としての勤めでもあった。

しかし、当然ながらユイカはそれを知らない。知らずに夜間の勉強に、侍女たちを付き合わせる。侍女にだって人間なのだから彼女ら自身の生活があるのだが、どうやら主人の立場を得たばかりのユイカには、そこまで考えが及ばないらしかった。

突然の環境の変化を受けて、自分の事で精一杯と言うのもあるのかもしれない。

だからと言って、彼女の側に居る者は殆どが仕える側や格下の立場であるから、誰もその事を教えられないのだ。

故にそれは有る程度仕方の無い事ではあった。

けれど貴人付きの侍女や侍従の仕事は、正に気遣いの業務だ。常に気を張り詰めて主人の望む事を成さねばならない。

それに今までは同じ侍女といえど、系統の違う仕事に携わってきたフィリスである。

仕事であるのだから仕方は無いが、慣れない業務に加えて連日不規則な生活を強いられ、正直体力的にも精神的にも疲労が限界近くまで蓄積していた。

それに加えて、だ。

「……また」

ユイカの休憩時間に出すお茶を用意していたフィリスは、用意されていた熱湯から漂う、少しつんとした香辛料のにおいに気付いて嘆息した。

念のために湯入れの蓋を開けて、陶器の内側を確認してみれば、底の方には赤い色が沈んでいた。乾いた木の実のようなそれは、リッアン草の蕾だった。特徴的な形の蕾から生まれる独特の強い辛味は、香辛料として重宝されている。

フィリスは時間はかけずけれど念入りに、他の茶器にも何か異常

が無いかと確認する。

やがてそれ以外には特に何も特異点は無いと判断すると、彼女は近くに居た部屋付きの侍女に、新しい湯と茶器の用意を頼んだ。そして、カレーヌを探しに給仕用の小部屋を出る。

紅茶にリッアン草の辛味は合わない。どころか、この香辛料は甘味とは相容れないのだ。砂糖とあわせると、のったりとしているにも関わらず、舌を刺すような辛味が吐き気を覚えるほどに強く味覚を襲う。

ユイカは紅茶には、決まってたっぷりのミルクと砂糖を入れるのだ。気付かずにリッアン草の風味のついた湯で紅茶を入れれば……結果は簡単に予想がつく。

五日前にも似たような事があった。

その時の発見者は花茶を淹れていたカレーヌで、フィリスは横で茶菓子の支度をしていたのだが。

温度を確認すべく、何気なくカレーヌが純銀製のスプーンで試し淹れた茶をかき混ぜたのだ。そして、茶器の底をかき混ぜた時に僅かにスプーンを捕らえたでろりとした感触に、彼女は目を瞠らせた。

そして、曇りの無いスプーンでかき混ぜるたびにかすかに立ち上る、茶にしては違和感の残るにおい。

カレーヌが眉をひそめながら花茶に使った湯やら茶器やら茶葉を点検していけば、すぐに茶葉に何か色のついた粉末が混ぜられているのを見つけた。淹れていた花茶は、粉末状に砕いた花実を、たっぷり湯に溶かしてから濾すと言う手法が用いられる。大量に使用する茶葉と、ほぼ同じ色合いの粉末には、よく注意をしなければ気づかない。

そこから先の彼女の処置は、手馴れたもの。

その場で前掛けを脱ぎ、カレーヌはフィリスを伴って茶を淹れていた台から離れた。そして作業をしていた部屋は締め切り、白羽宮の人間全員に一切近寄らないように指示する。そして「気休め程度

だけれど」と、煮沸し冷ました水を用意させて念入りに手を洗い、同じ部屋で作業をしていたフィリスにもそれを促した。

毒かもしれないと、その時はカリリー又は小声で言った。加えてユイカに近づかず、体調に異変を感じたら直ぐに言うようにと念を押した。

そして半刻の内に、こう言った物事を担当する人間だろうか、鈍い藍と黒の装束を纏った数人が来ると、彼らに後始末と調査ゆだねたのだ。

他の面々が後始末をしている間に黒装束の一人である女がカリリー又とフィリスを軽く診断し、問題が無いと判断すると、彼らは部屋にあった調度やらを持ち出して去っていった。

そこまですを見届けると、カリリー又は「もう大丈夫でしょう」と、フィリスに仕事に戻るように促した。

その日は一日、毒か何かと不安に思いながら過したのだが 次  
の日に知らされたのは、茶葉にまぎれていたのは化粧品 粉末を  
化粧水で溶かして使う形の白粉おしろいだったと言う事実。

少し拍子抜けはしたが、毒物ではなかった事に安堵したフィリスに、カリリー又は「恐らくユイカ様に対する、軽微な嫌がらせでしょう」と告げた。

軽微、だと言うのか。いや確かに、混入していたのは毒物ではなかったのだから、この王宮の奥では軽微な部類に入るのかもしれないが。

フィリスはその時、そんな驚きと不安を心中に渦巻かせながら、「誰がこんな事を」とぼつりと呟いたのを、自分でも良く憶えている。

それ以来、白羽宮ではユイカへの嫌がらせが徐々に増えていったのだから。

掃き清めたばかりの渡り廊下に そこはベルナル王子の来訪にも使われる 泥土が投げられるとか、ユイカに出す茶を淹れる茶器に絵の具や油等の異物が仕掛けられていたりとか。

ユイカに見つかる前に処理できるものばかりだったが、その処理は下の者達に地味に負担がかかるものばかりである。

通常以上に負担が大きいのは、だからこそでもあった。

宮殿内のいくつかの部屋を見て回ると、フィリスはやがて控えの間でカーリーヌを見つけた。

部屋には彼女以外誰も居ない。皆前述の通り忙しいのだ。だからこそ、カーリーヌのつかの間の休息の時間を邪魔するのは気が引けたけれども、最終的にはフィリスの独断だけでは、嫌がらせは処理しきれない。

「カーリーヌ様」

遠慮がちに声をかけると、ぼんやりと窓の外を眺めていたカーリーヌは、すぐに気がついてフィリスの方を見てきた。

金髪を揺らして振り返る。

「今度は紅茶の湯にリツァンの蕾が入れられていました。……新しい湯を頼みましたので、ユイカ様に出すお茶はすぐに用意できるかと思います」

「まあ……また、ですか」

カーリーヌは細く息をつくと、音も無く立ち上がった。そのまま、元々フィリスが居た給仕をするための小部屋へ、急ぎ足で歩を進める。

フィリスがそれに付き従うと、カーリーヌは振り返らずに口を開く。「湯以外には、何か混ざっていなかったのですね？」

「ええ。確認しましたが恐らくは。ですが入っていない保証もないので、全て新しいものに取替えに行ってもらいました」

「そう……わかりました。片付けは私が指示しておきますから、フィリスさんはユイカ様にお出しするお茶の用意をお願いできるかしら？」

「わかりました。……あの、カーリーヌ様」

宮の中、幾つかの角を曲がり、元の給仕部屋の扉が見えてきた頃だった。

二言三言、カリリーヌと互いに報告の言葉を交わしていたフィリスは、少しだけ間を置いて口を開く。

「王子殿下には、報告しなくて良いのですか？」

その言葉に、金髪の侍女は少しだけ緊張した面持ちで立ち止まって振り向いた。

王子 第一王子ベルナルルの事だ。

ユイカと白羽宮はベルナルルの管轄である。嫌がらせもカリリーヌ曰く軽微とは言え、それでも此処で起こった事。

王子の側近騎士クロードから、フィリスもここ数日で幾度か「ユイカ様の事、よろしく頼む」とか「ユイカ様の周囲で起こることは、事細かにシュザン殿を通じて殿下に報告して欲しい」等と繰り返し言われている。第一王子は頻繁にユイカに会いにくるので、彼の護衛として控えるクロードとは、フィリスも何度か接触していた。

そう幾度も言われているからこそ、最初に茶葉に白粉が混入していたあの日、カリリーヌはフィリスに、「この事は誰にも、ルグラン様にも言わないように」と告げられた一言が気にかかった。

けれど王子ベルナルルやクロード・ルグランの態度からして、彼らはこの白羽宮で起こっている事を、どうやら知らないらしい。

それはどこことなく、妙な構図だった。

それに嫌がらせがあるのなら、それをする人間がどこかに居るはずである。そもそもユイカが存在を知る人は、少ないのではなかったか。

けれどフィリスだって、ユイカに仕えると言う事よりも優先させるべき目的のために、アデルには彼女の存在や出自を話した。他の誰かもまた、そうしていたっておかしくない。

けれども現在のフィリスは心から忠義を捧げていないとは言え、一応ユイカに仕える者だ。

主の害は侍女にも及ぶ。気になるのも当然だった。

「ええ。ベルナルル様には、ご心配をおかけしてはなりませんもの。この事もわたくしたちが処理できる範囲なので、報告はしな

いほうが良いのです」

カーリー又は言葉に真剣さを籠めて言う。

「ですが」

「フィリスさん。ベルナル様には、この事は知られてはなりません。少なくとも、あなたの口からは」

少しだけ言いよどむと、カーリーが少しだけ声の大きさを落として返す。

気圧されるかのような、鋭い口調。するりと言葉をナイフのように滑り込ませた彼女は、それだけ言うところさあ、早くユイカ様のお茶を用意してしましましょう」と、微笑してフィリスを給仕部屋へと促した。

それは有無を言わさぬ言葉であつたのに、声音は気遣わしげだったのが、どこか引かかる。

フィリスは違和感に内心眉をひそめながらも、給仕部屋へと続いた。

部屋付きの侍女の一人が、丁度代わりの茶器一式を持って、小机に置こうとしている。

声をかけて作業を引き継ぐと、フィリスは今度こそ異変がない事を確認してから、休憩用の茶の用意を再開した。

軽く時計へ視線を遣れば、針はそろそろエドワールがユイカに文字を教授する時間が終わる事を示していた。



## 10 - - - 少女の知りえぬ裏事情（後書き）

大分更新に間が開いてしまいました……。これもきつと多趣味の弊害。

それと中世の毒の描写について調べていたのが地味に時間を食いました。最初は嫌がらせに異物混入なのではなく、ストレートに毒の予定だったのですよね。まあ、結局、あまり良い資料が見つからなかったので白粉や香辛料になりましたが。

よく知らないものについて書くのは危険です。矛盾と描写的な意味で。

次話くらいには、初期からちよくちよく名前の出てくる弟君を出せたらいいなと思っています。

また、Web 拍手を設置しましたので、何かあってもなくてもぼちって下さいますと、ちよつとだけ更新スピードが上がったり上がらなかったりするかもしれません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1663k/>

---

司書官と侍女の魔王様

2010年10月8日14時38分発行